

ふくしま再生の会

第16回活動報告会 記録

避難指示解除から半年

**今何が課題かー村民の声**

2017年10月22日

東京大学弥生講堂アネックスにて

特定非営利活動法人ふくしま再生の会



## 避難指示解除から半年 今何が課題か—村民の声

### 報告会記録パンフレット発行にあたり

飯館村は2017年3月31日に、長泥地域を除き、6年に及んだ避難指示が解除されました。

帰村を選択する人、多くの不安を抱え迷っている人、当面村外に生活すると決めた人、帰村できない人、それぞれが生活と生業の再建という困難な問題に直面しています。

私たちは避難指示解除後半年を経過した2017年10月22日に、飯館村の佐須地区や松塚地区の方々を東京にお招きして第16回の報告会を開催いたしました。ご参加いただいた村民の方々には、佐須や松塚でのこれまでの取り組みと共に、将来に向けた計画をお話いただきました。また9月に飯館村で行われた村議会議員選挙で初当選を果たした若手の代表的存在の佐藤健太さんに、若い世代のこれからの村創りについての考え方や村が直面する問題点をお話いただきました。飯館村役場の方々にもご参加いただき村民の営農再開に向けた村としてのビジョンをご説明いただきました。この他、福島県相双農林事務所、民間企業の立場からの発言もいただき、村民、役場、企業、市民ボランティアそれぞれが今何を行い、そしてこれから協働で何をするべきかを話し合いました。

ふくしま再生の会は、福島第一原発事故後2011年6月以来、全村避難後の飯館村で、村民・ボランティア・専門家の自立性・創造性を基礎に、全村の放射線・放射能の測定、農業・山林再生の試み、健康医療ケアの実践など、多彩な活動に取り組んできました。

本報告会と並行して、2011年以來のふくしま再生の会の活動状況と得られた結果を、総合的にポスター展示で見てくださいました。これら現実のデータをもとに、今後の生活や農業の課題をオープンに議論しました。

本パンフレットは、参加いただいた村民の方々の発言を中心に、会員・関係者の方々の発言を収録したものです。村民の生の声、参加者の声をお読みいただくことで、福島・飯館村の現状へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。また今後の福島・飯館村の生活や生業の再生に向けて、ご自身の協働のあり方を考え、お知恵・お力をお貸しいただき、そのことが多彩な活動の発展につながることを期待しております。

2017年12月

認定NPO法人ふくしま再生の会 理事長 田尾陽一

### ◇ 報告会プログラム ◇

開会・挨拶・飯館村・福島県参加者ご紹介

#### 第1部 村民の声

- |                          |                       |
|--------------------------|-----------------------|
| 1. 「復興の基本方針・営農の再開に向けて」   | 飯館村役場 復興対策課長 中川喜昭     |
| 2. 「松塚での牧場づくりの展望と畜産業の再生」 | 松塚地区 畜産業 山田猛史         |
| 3. 「佐須の地域再生計画の作成に向けて」    | 佐須行政区長 農業 佐藤公一        |
| 4. 「佐須のコミュニティ再生について」     | 佐須地区 農業 老人クラブ副会長 菅野永徳 |
| 5. 「村づくりの今後を担う若手世代の課題」   | 飯館村村会議員 佐藤健太          |

「私たちが協働しようとしていること」

東京大学大学院農学生命科学研究科教授 本会副理事長 溝口勝

#### 第2部 ポスターセッション

#### 第3部 ディスカッション

初めに 飯館村農業委員会会長 本会福島代表・副理事長 菅野宗夫

まとめ

## **<開会 挨拶・参加者ご紹介>**

### **田尾陽一 ふくしま再生の会理事長**

では報告会を開催させていただきます。私は総合司会を務めさせていただく田尾です。今日は台風とか雨とか大変な天候にもかかわらず、お申込みいただき、さらに遠路からも足を運んでいただきありがとうございます。村民の方々も台風の進路など大変心配な時なのですが来ていただきました。それでは最初に私の方からちょっとご挨拶です。先ほど、NPO総会がありまして、皆さん満場一致ですべての案件が承認されました。ここで慣例となっております報告会を開催させていただきます。なお、ふくしま再生の会の報告会は、色々なチームがテーマごとに出来てその報告が何十とあるのですが、今日は飯舘村からこられた方々にこれからどういうふうに地域を再生していこうかというお話を主に開催します。二つの行政地区の方々にお話しいただくほか、村役場から中川課長に来ていただきました。実は村役場の方で何人かの方が来られるというお話がありましたけれども、総選挙に取り組まなければならないということになりまして、大変お忙しい。その中で一番お忙しい中川課長に来ていただきました。それから相双農林事務所から、森口さんがいらっしゃっております。農業振興普及部長さんでいらっしゃいます。

それから、演者の方をご紹介する前にこの会を共催していただきました東大農学生命科学研究科長でいらっしゃいます丹下健先生からご挨拶をいただきたいと思います。

### **丹下健 東大農学生命科学研究科長**

皆さんこんにちは。研究科長の丹下と申します。福島で原子力発電所の事故が起きてからもう6年半になります。東京大学としては1年目の秋ごろからですが、様々な調査をはじめました。農業、農林水産畜産業というのが福島の被災された地域の主な産業であるということもありまして、農学部がどういう貢献ができるのかを、有志の教員で活動を始めました。それから徐々に色々なことが分ってくる中で、今、どういったデータをどういうふうに提供して行くのが大事なのかということと、新しいコミュニティ、避難などで一度壊れたコミュニティをどう再生してゆくのかということ、その為には、元々の産業であった農林畜産業をどういうふうに再生、再構築してゆくのかということがこれからの大きな課題だろうと思っています。6年半経って、マスコミなどで取り上げられることも段々減ってきている現状ではありますが、そこに暮らしておられる皆さんにとっては日々のことであろうと思います。なかなか、これといった解決策がすぐに出てくるといったわけにはゆかないということは我々も理解しておりますが、何か次の世代につながるような取組を永く続けさせていただきたいというのが我々の正直な気持ちです。農学部で行われております研究の報告会も来月予定されております。そこでは様々な研究者が今なにをどういうことが解ってきているのかということをご報告させていただきたいと思っています。是非、一緒に頑張っていければと思いますので今後ともよろしくお願いいたします。

**田尾** ありがとうございました。農学生命科学研究科の丹下先生はじめ職員の方、サークルまでの職員の方、ボランティアの方、我々も加わり、サンプルづくりや放射能測定を繰り返しており、それからこの会場もお借りできるようになっております。ありがとうございます。それで飯舘村の参加者のご紹介をさせていただきます。相双農林事務所の所長さんの芳見茂さんは今日のご都合が悪くなりまして、最初に相双農林事務所の農業振興普及部長さんの森口克彦さんにご挨拶をお願いします。

## **森口克彦、相双農林事務所農業振興普及部長**

皆さんこんにちは。相双農林事務所の農業振興普及部長の森口と申します。当事務所の所長の芳見も今日参加させていただく予定でございましたが、台風の災害待機ということで事務所の方に詰めておまして、私一人で参加させていただきます。私はこの会に初めて参加させていただきました。4月から相双農林事務所の方に赴任を致しまして、相双地域の農業振興の仕事をさせていただいております。飯館村さんには何度も足を運ばせていただいて、農家の方々の営農再開をお手伝いをさせていただくために、事業の面とか農業改良普及という技術の面で一緒に仕事をさせていただいているところがございます。避難解除から半年が経ちまして、営農再開をしたいという声も益々強くなってきているなかで、我々がどんなことをお手伝いできるかを、日々模索しています。補助事業の面でどれだけみなさんに上手く使っていただけるか、後はそういった事業を使っただけでも、ゼロからというよりマイナスからのスタートとなる面が大きいので、そこを技術的な面でどうやって引き上げていくかを考え、昔の姿、それ以上の姿になってゆけるようにお手伝いして行きたいと思っております。

私はもともと畜産技術職だったものですから、飯館村さんには何度も若いころから足を運ぶ機会がありまして、牛がいっぱい放たれていた水田と畜産、後は多種多様な作物に取組んでおられた皆さんの姿がもう一度戻って来るように、すごく期待をしているところがございます。今後とも相双農林事務所としては、皆さんのお手伝いを一生懸命にやって行きたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

**田尾** ありがとうございます。それではこれから村民の声ということで、中川課長を筆頭にお話しさせていただきます。それで現在こられている方を私の方からご紹介します。飯館村役場の先ほど申し上げた復興対策課長の中川さんです。

### **中川喜昭 飯館村復興対策課長**

中川です。よろしく申し上げます。

**田尾** この間の村議選で第2位当選という飯館村村会議員で若手のホープ佐藤健太さんです。

### **佐藤健太 飯館村村議会議員 佐藤工業専務**

佐藤です。よろしく申し上げます。

**田尾** 松塚地区で畜産を再開されております山田猛史さんです。

### **山田猛史 飯館村松塚地区 畜産業**

山田です。よろしく申し上げます。

**田尾** 佐須行政区長の佐藤公一さんです。

### **佐藤公一 飯館村佐須行政区長 農業**

よろしく申し上げます。

**田尾** 私たちの顧問でもありますが、佐須老人クラブの副会長菅野永徳さんです。

### **菅野永徳 飯館村佐須地区 老人クラブ副会長**

よろしく申し上げます。

**田尾** 私どもの副理事長で飯館村農業委員会会長の菅野宗夫さんです。

### **菅野宗夫 ふくしま再生の会副理事長 飯館村農業委員会会長 佐須地区農業** (起立して会釈)

## <第一部 村民の声>

**田尾** それでは、以上の方々に発言をしていただいて、その後ポスター展示を見ていただき、その後、17時から質疑応答をしますので、最初に皆さん約10分ぐらいずつ村民、村役場あるいは村会議員という立場でお話しをしていただきたいと思います。最初は中川課長をお願いします。

### 中川喜昭 飯館村復興対策課課長

それでは、あらためまして飯館村役場の復興対策課長の中川です。よろしくお願いたします。

再生の会さんとは実は23年に原発事故がありまして、その時佐須の菅野宗夫さんのところに有志の方々が集うという形になったのかなと思っています。再生の会の方で飯館村に何かお手伝いをしたいということで、当時も担当課長でありまして色々話をする中で、24年度からですね、村民が一番心配しているのは空間線量だということで、当時、国、県の方でもモニタリングポストで公表はしていたのですが、村民の方は何か工作しているのではないかと疑心暗鬼な状態になりまして、村としても実態を知ってもらいたいということで、測定を村民の方々に委ねながら20行政区を測ってもらうということで、再生の会さんと繋がりができたわけでありまして。それ以降、飯館村をフィールドとして、村としては空間線量の測定とか土壌の放射能調査なども委託でお願いしながら今までやってきていただいたというわけです。その他にも、向こうの展示の方でもありますがいろんな調査・測定などもしていただいて村の中でも報告会をしていただいています。本当に再生の会さんには大変お世話になっているという形でお付き合いさせていただいております。私も復興対策課、その後、除染担当課長、また復興対策課長ということで長年お付き合いをさせていただいています。今日与えられた部分が営農再開ということで、先ほど、県の相双農林事務所の森口部長さんからありましたように、今、国・県の支援をいただきながら農家の方々に頑張ってもらっているという状況であります。

スクリーンの方に営農再開ビジョンということで、避難解除、おかげ様で今年の3月31日で帰還困難区域を除いて全て避難解除となりました。村の方としては3月31日に避難解除をするということで国の方と前年から交渉をしておりました。それで村民の方々が戻られて営農再開するにはある程度の計画がないとできないであろうということで、営農再開ビジョンを作ってきたところなんです。それで長い文章だけでは村の方々も理解し難いということで、一応ダイジェスト版で、それぞれの地区に入っ

The image displays two documents related to the village's agricultural revival. On the left is a poster titled '飯館村 営農再開ビジョン' (Itate Village Agri Vision) featuring a photo of hands holding soil with a small green sprout. On the right is a flyer titled '飯館村菅野村長メッセージ' (Itate Village Mayor's Message) with a photo of Mayor Sugano and text about the village's recovery and agricultural revival.

**飯館村 営農再開ビジョン**  
Itate Village Agri Vision

ダイジェスト版  
01051

そろそろ、はだづべ。

飯館村「農」の再生に向けて、あなたの農業のスタイルをチェック

4つのステップで始める 農業再生への道 村内で始まっている 農業再生への取組事例紹介

菅野村長からメッセージ  
応援メッセージ  
JAふくしま未来  
株式会社大田花き

飯館村

**飯館村菅野村長メッセージ**  
『ともに興さん、この村を』

飯館村は、避難指示の解除で、やっと復興のスタート地点に立ちました。これからは、私たちが「復興の担い手」となって、村を再生、再開していかなければなりません。この種子は、村で「農」にたずさわることを考えていただくための最初の指標になれば、との飯館村復興対策課長の思いを受けて、何がまわりました。先人がついできた歴史を今もついでに、その思いに響けることができます。その思いを今もついでに「は」とし、種も多量にまわらす「農」を復興させることで、改めて「農業再開」のための第一歩が生まれます。農業の皆さんの笑顔と並ぶものは必ずあります。村民が離れた村を目標として、「夢」のためにともに興さんしましょう。

販売先からの 村の「農」の再生に向けて、農産物の販売先となる 応援メッセージ  
農協・企業からも、応援の声をいただきました。

JAふくしま未来 高玉輝 課長  
株式会社大田花き 大田花き 中野賢司 社長

飯館村、飯館村は15億円近いの農産物の販売がありました。今年、3月31日の避難解除により「食料として営農再開する方が多い」とも聞いています。少しでも多くの村民の方々の帰還と農業再開に向けて「JAふくしま未来」をはじめ「JAグループ」が一丸となり農業再開を支援する村民の方々に寄り添い、特に「いたて」のブランド野菜や美味しい直売野菜の生産販売に尽力してまいります。

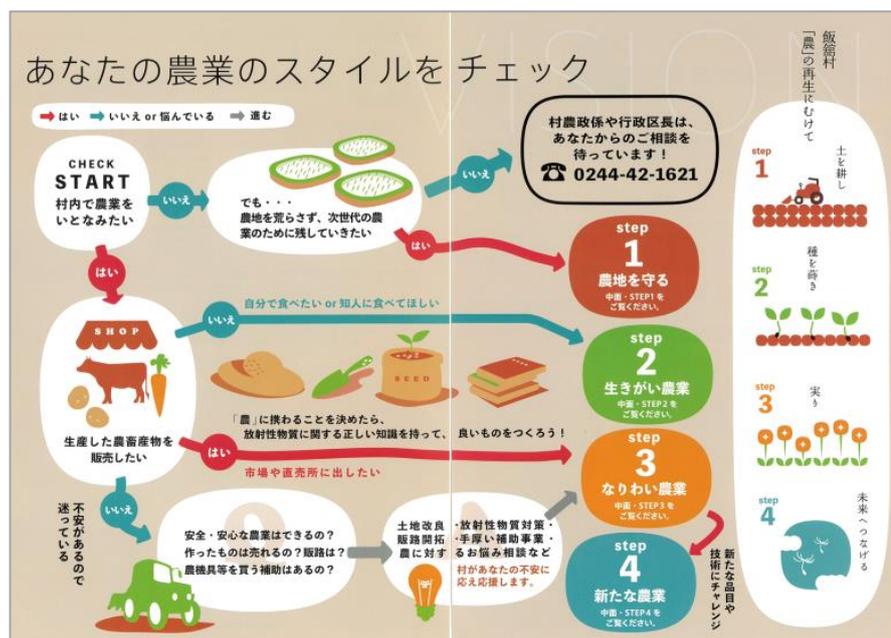
この度、飯館村で農業再生事業が向かったことを大変嬉しく思っております。中でも、花井は農産物の影響も少なく、消費者にも受け入れやすい環境が整っています。皆さんが一生懸命生産された花井は、さっさと消費の心を持つことで、弊社も第一、飯館村に貢献したいという思いを心から抱いています。ぜひ一緒に飯館村の花井を通して日本全国に感動を届けたいと思います！！

「農」に関わることなら  
どんなことでもお問合せください！

飯館村管轄  
復興対策課 課長 係  
tel.0244-42-1621  
受付：平日 8時半～17時

て説明している資料がこれです。表紙は花卉農家の高橋日出夫さんの両の掌に土があってそこにトルコキキョウの苗がある写真にして「そろそろ、はだづべ」と書きいれました。「はだづべ」というのは、そろそろ百姓をやってみないかという方言になっております。

次のページ、見開きの状態で原本はこんな感じなのですが、村民の方、農民の方は農業をやるにもやはり不安と、後どうしたらいいかということが先に立ってきまして、ステップ1から4というふうに分けて、スタートからはじめてチェックをいれながらステップ1, 2, 3に導くという、いってみれば道し



るべのような形で作ったものであります。例えばスタートからいって、村内で農業を営みたいに「いいえ」という方には青い矢印の方に進んでいただいて、でも農地は荒らさずに次世代の農業のために残していきたいということに「はい」という方は、ステップ1の農地を守るに進むという形にしております。「いいえ」という方は飯館村では農業をやらないよという方々で、それで農地も管理しないよということになれば、やはり地域や村としても大変困るということで、村の農政係あるいは区長さんに相談してみてくださいというふうにしています。

後、「農業を営みたい」が「はい」の場合は、そこで「生産した農畜産物を販売したい」という問いに対して「いいえ」の方は、自分で食べたい、知人に食べて欲しいというような方で、販売・出荷をしないという方々になります。そういう方々については「生きがい農業」になります。そういう方々については、村の方から事業費の2分の1で限度額50万円まで補助しますよというような制度を設けて、生きがい農業の方に進んでみてくださいとなります。ストレス解消に土いじりをしたいと



いう方々がこの「生きがい農業」になります。まだ不安があって出荷ができるかどうかという心配がある方々なども、そこで自信をもって、「なりわい農業」の方に移行してもらえればという期待を込めての「生きがい農業」であります。

そこで「生産した農畜産物を販売したい」というのに「はい」となった方々は、市場・直売所に出したいということで、ここは「なりわい農業」という呼び方をしておりまして、ここはいわゆる、お金を儲ける農業、この部分については国・県の支援を受けて農業に取り組んだらどうですかということになります。村としてはこの「なりわい農業」は農家の方々、やる気のある農家を応援したいという思いで、今いった国・県の支援事業を紹介しながら「なりわい」をやっていた。併せまして、やはり売り先がそれに伴ってきますので、計画をする作物に対してどのような販売先があるかも農協さんとか市場なども調査してそこを紹介していくところまで手当しているところでもあります。後、不安があったり迷っているということで「生産した農畜産物を販売したい」が、「いいえ」となった方々についても、まずは計画を聞きながら、ここにありますように「安全安心な農業はできるの?」「作ったものは売れるの?」「販路は?」「農機を買う補助はあるの?」といったところで、先ほど言ったように計画段階で個別面談をしながら、「なりわい農業」にもっていくということでもあります。

それで「生きがい農業」も「なりわい農業」も、まずは除染後の農地で作るということでもありますので、セシウムの状況はどうなっているの、それから土の栄養状況はどうなっているのということで、希望のある方には土壌分析を、県の方の指導でやっているという状況もあります。後は5センチ削り取りをして客土をした土壌で、かなり肥料的にも少ないということで、希望があれば県の事業を使ってたい肥なども無料で配布しております。色々な支援策をしながら「なりわい・生きがい」を進めているということです。

そして「なりわい農業」でも、もっと新たな技術を取り入れて行きたいというのが4番の「新たな農業」で本人の希望があればそれらも支援するというので考えています。現在「生きがい農業」を希望している方々、今年度の事業で140名の方々が村の方に申請・申請が終って実績を出しています。また、「なりわい

**step 3 なりわい農業**

1 相談する 村に営業再開の意向を伝えよう  
2 参加する 営業再開のための計画を立てよう  
3 準備する 営業再開に向けた準備をしよう  
4 始める 営業を再開し、農畜産物を販売しよう

5 始める 新たな農業を実現するための計画を立てよう  
6 準備する 新たな農業実現に向けた準備をしよう  
7 始める 新たな農業を始めよう

**point** 新たな技術の活用に向けて

● 野菜等の病害防除やICTによるハウス内の環境制御などのほか、自動走行トラクターや除草ロボットなどの省力化技術の導入が進んでいます。  
● 関心のある方は、村や県に相談してみよう!

**STEPS** 経営の安定・拡大化に取り組もう! 新たな農業に挑戦しよう!

● 販売目的の農業には、手厚いさまざまな支援策があります。  
● 専ら収入の増強を求めて生産品は、納税、必要機器などを村に伝えましょう!  
● 村では緊急対応も一緒に取組めます。

● 経営支援に加えて、新たな品目の栽培や新技術導入への技能を積極的に支援します。

大倉 ふるさとで、できることから始めたい

松岡 農業を次の世代につなげたい

伊丹 産肉牛の血統を残したい

開成・松塚 新たな産地を目指して

二枚橋 一歩ずつで6次化へ

上野 高付加価値ミニトマト栽培に挑戦したい

い農業」は先ほどの国の支援・県の支援という形で実績としてやっている、あるいは今年度中に進めるという方々の申請を75名受付てきまして、まだ200件足らずですから少ない状況ですが、今年、避難解除になったという中でこれほど営農をしてみたいという方々がいるというのは、村としても予想はしていなかったところでもあります。

避難して村内でやるということですが、不安はあるのですが、やはりそこで見本となったのが、実は避難先で農業をされてきた方々がいるということでもあります。避難先、福島市とか中島村、喜多方市、田村市の船曳、県外では那須塩原、千葉県の山武、北海道の栗原というように避難先で営農再開をしてきた方々が数多くおります。そういう方々の姿を見て自分たちもできるのではないかという思いの方々が今年になって新たにきているということでもあります。後ほど発表していただきます畜産農家の山田猛史さんも皆さん顔も事業内容もお分かりかと思いますが、避難した中島村で畜産を開始されましてその後福島市の飯野町にまた引っ越しされて今年は飯舘村で水田放牧をということです。多分水田を作る面積が少なくなるであろうということで、地域の土地、田んぼを使って放牧をするということ、県の実証事業としてやっておられる。

後ほどお話しただけだと思いますが、そのような方々の姿をみて、「なりわい」として今回の75名の方々がいたのかなと思っております。そういう意味で、避難先で頑張ってくられた方々に感謝しているところでございます。10分ということでもありますので、村の村民の方々に案内をする営農ビジョンという部分の説明のみとさせていただきますが、村としては何しろ農業をやりたい人がいれば色々な支援策・情報を出しながらやっていただく、ただ補助金ありきでの考え方ではして欲しくないという思いでやっている状況です。ですから国も県もただ補助金はくれません。ある意味、きちんとした営農計画がないと補助金はないということもありますので、その辺、うちの方の農政系の職員も理解しております、やる気を起こさせる、後はきちんとやってもらうための相談もしながら今進めている状況です。

今後まだまだ何十年も放射性物質と付き合っていかなければならない村なのかなと思っておりますが、なにしろ戻って頑張られる方々は村としてもきちんと応援したいと思っておりますし、ふくしま再生の会さんにも側面からサポートしていただければなということを考えて私の報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。

**田尾** ありがとうございました。それでは、今お話しにもでておりました山田猛史さんからお願いします。

#### **山田猛史 飯舘村松塚地区 畜産業**

こんにちは。山田猛史です。

今映っている写真というか絵は松塚地区の全景です。地区のこの水田を中心としたエリアがう



## 関根・松塚地区 水田を利用した営農再開イメージ



こちら方の集落です。さほど大きい集落ではないのです。農家というか住民が44戸でした。現在、家族は別にしてもとにかく戻ってきている人が6戸、それから通いながらという人が7、8戸という状況です。私はその中には入りません。

私は一番先には西白河郡の中島村というところに牛を連れて避難をしまして、20頭ぐらいの牛を連れて、災害の時から牛はやめないでずっと今まで続けてきたものです。そして、今は、中島村から福島市の飯野町に移りまして、牛は20頭から今は49頭になりました。中島村には俺と女房と母親と年雇いのまあ老人組だけが避難して、若いもの息子ら夫婦と孫は京都の方に避難しておりましたから、それが去年の3月に息子が京都から帰ってきて、一緒に今は飯野で牛飼いをしております。

そんなこともあって頭数も増えましたし、将来の村に帰ってからの畜産の夢は具体的になってきてまして、繁殖雌を80頭、それに一貫経営の肥育もしたいというようなことで今進んでいます。さきほど課長から国や県の予算を使いながらというような紹介がありましたが、私もいっぱいいただいて、牛舎を作ろうとしておりますが、俺の計画だと今頃はできている計画だったのですが、全然着工にもなっておりません。聞いたら来年度になるようだということで、非常に残念でなりません。本当は今年牛舎を作って、今いる繁殖のほとんど、49頭ですがこれを飯館に移して、来年母屋を建てようかなという計画だったのですが、完全に狂いました。

そんなことで、俺のところは震災前は複合経営だったのです。米2ヘクタール、牛29頭(母牛)、たばこ2ヘクタール、ブロッコリー1ヘクタールで非常に複雑な経営だったのです。年中忙しい経営をしていたのですが、もうこうなっては昔の姿に戻れないというようなのが実態ですし、私ももどらないと思っています。それでやっぱりこれから飯館村は、複合経営ではなくて単体の経営を模索した方がいいんじゃないかなと思うのです。花なら花で食べられるような経営、畜産なら畜産で食べられるような経営、そのような経営を目指して、以前より大型、大きな農家の経営体を作った方がいいんじゃないかと思っているのです。



それで再生の突破口はおれらの時代の者たちがもうひと汗もふた汗もかいてやる。それが再生の突破口ではないかと思うのです。息子がいまいちハッキリしない、将来が見えてこない若者がいっぱいいるのです。それで我々、今70歳になろうとしているもの、あるいは定年退職した60代のもの、そのような人が今もう1回汗をかいて、それじゃあ村でもう一回農業をやってみるかという行動こそが突破口じゃないかなと思っています。

それでこの俺のところの水田ですが、先月ですか、地区の人たちにアンケートをとったところ、特に水田です、畑はのぞいて、どのような考えがありますかと聞いたところ、ホールクロップ<sup>1</sup>をやりたいという人（現在やっている人がひとりですが）その他に2人、それからそば作りしたいという人が3人、それから今花を作っている人、高橋日出夫さん含めてもう一人増えて4人、ソバ作りしたい人3人、畜産やる人はだれもいなくて私一人ですが、そのような形で結構、水田のこの黄色いところはソーラー電力でN T Tに土地を貸しています。

それでこちら側を営農再開の水田ということで区分けしておりまして、約40町歩あります。その殆ど俺が借りなければならぬのかと思っておりまして、そうではなくてやりたいという人も出まして、まあチョットがっかりもしておりますし喜んでおります。それで現在、農地を荒らさないための県の事業なんかもありまして、一年間に10アール当たり最大で35,000円の補助をうけられる事業がありますから、草刈りロータリーをかけたたりしてその金を取りたいという、いやいやそんなことは言わないで俺らに貸せとは言いませんが、その仕事が終わったら自然と俺のところの農地は集積できるのではないかと思っていますのです。

現在は40町歩のなかで自分の土地も含めて20町歩位はあります。その後も増えるんじゃないかなと思っています。

そんなことで、今やろうとしている人の中で若い人はいません。花にしるホールクロップにしるソバにしる若い人はいません。年齢は60を過ぎた人ばかりです。その人たちがやろうとする行動こそがその次の世代につながる行動ではないかと思っていますのです。ですから俺の息子は震災の時も一緒に経営して畜産担当の労働者としてちゃんとやりましたから、震災終わって解除されて初めてサラリーマンから農業やるということではないですから、別に新規就農でもないのですが、これから5年10年引き続き頑張ってやっていたら他の後継者もぽつぽつと出てくるのではないかと思っていますのです。

<sup>1</sup> 稲の実が完熟する前に、実と茎葉を一体的に収穫して乳酸菌発酵させた飼料のこと。稲ホールクロップ・サイレージとも呼ばれます。水田の有効活用と飼料自給率の向上に資する飼料作物として、作付面積が拡大しています。（農林水産省ホームページ [http://www.maff.go.jp/j/chikusan/sinko/lin/L\\_siryo/#wcs](http://www.maff.go.jp/j/chikusan/sinko/lin/L_siryo/#wcs)）より

全ての家の後継者が農業に携わるということは絶対にありません。この震災がなくてもそういう状況ではなかったですから、この震災で今のような状況が5年か10年ちょっと早まっただけの話であって、だまっていれば5年か10年先に今のような状態になったと思うのです。ですから、そんなにたまげる必要はないのではないかと思います。俺としては、息子に「今、やれない、やらない人が多い中ですから、やろうとしている人にとっては絶好のチャンスなのだ」と常に言っているのです。牛なんか和牛の繁殖などは仔牛が少なくて高騰してます。全国的に。それは一方で後継者もいなくて高齢になってやめざるを得ない、できないという状況ですからやめるんです。一方では増やす人もいますが、増やす人よりやめる人が多くて仔牛が少ないので、高いのです。もう50万は安かったなという値段です。今月、但馬の牛は80何万90何万という数字だったそうです。それで、70万というのは安いのではないかという話が、息子のデータに入ったそうです。そんなことで、再生の会の力を借りながら頑張っていきたいと思います。よろしくをお願いします。

**田尾** ありがとうございます。猛史さんからはいつもこの15年計画というのを聞かされておりました、80歳までということですね。

**山田** 80歳までは現役でその後も惰性で5年ぐらいいは行けると…

**田尾** そういうことで大変先進的に前に進むということでございます。再生の会もお手伝いについて非常に興味深い種付け小屋を作ったり、畦シートを貼ったり色々やらせていただきました。来年の春には周辺をさらに拡大するという話がありましたので、楽しみにしています。

**山田** よろしくをお願いします。

**田尾** それでは、その次に佐須行政區長・佐藤公一さんから佐須地区の地域再生に向けてお話しをお願いします。

#### **佐藤公一 飯舘村佐須行政區長 農業**

あらためましてこんにちは。佐須の佐藤といいます。先日は再生の会の佐須の集会で、東京大学の応援団長が来ていただきまして、我々グループで集まった方々に、溝口先生はじめ元気をつけてもらいありがとうございます。また常日頃は放射能の指導をしてもらっていることについて敬意を表したいと思います。私のところは今、山田猛史さんが話したような状況にはないのですが、我々集落は佐須行政区といたしまして、いま計画している内容について私の方から報告というかご案内します。

国の方から3月31日に帰村というか避難解除になったのですが、いかんせん、現在、私のところは65戸あるわけですが、避難前は人口が赤ちゃんまで混ぜて234人でありました。そのなかで23年に避難となって、今年の3月31日に避難解除となって現在12戸の方が戻ってきております。そういう中で皆さんもご案内のとおり、いわゆるお墓に近い人だけです。さっきも言いましたが、避難前234人というのには子供もいましたが、今の状況のなかで子供さんがい

る方々については戻っていません。戻った12戸についても息子達は福島市や相馬市にいるという状況になっています。

それで我々役員で話し合っ、先人が作った土地についてどうするのかということをして3年前から議論してきました。私たちの集落は115号線沿いにあり、昔から専業農家は少なく兼業が多かったのです。現在、水田が60町歩、畑が80ヘクタールぐらいを先ほどいいました65戸で兼業農家としてやってきた状況でした。そういう中で、じゃあ農地をどうするか、特に国の方は除染したというのですが、私たちの所は標高450メートルで、先ほどの山田さんの所では基盤整備がされていますが、私たちのところは大規模な基盤整備をやっていないわけです。ここが115号線で、今度相馬から常磐道と東北自動車道をつなぐ高規格道路が開通します。佐須はこの行合道<sup>2</sup>から折れて来たところにあります。その中で農地をどうするかを皆で議論したところです。



いかんせん、基盤整備されていないところで、政府は農地を除染したというのですが、農地でも畦畔は除染されていないのです。そういうこともありまして、皆で「ンジャア除染もされてなくて農業できないべ」といったのです。後は土側溝<sup>3</sup>といって真野川から引いた水でやっているのですが、側溝が入っていない土側溝で除染がされてなかったのが、現在除染をしてもらっているところです。

そういう状況から、役場の説明を聞きますと農地の基盤整備なんだよということで、皆で議論してそれに「手挙げッペ」ということにしています。特に虎捕地域については15町歩あるのですが、そこは田んぼの面積より畦の面積の方が多いわけです。私達は今年、復興組合を立ち上げて草刈をしたわけですが、こんでは将来もダメになっちゃうよというなかでの考えです。この滑

<sup>2</sup> 国道115号線の伊達市石田の霊山こども村から佐須峠に抜ける道路。

<sup>3</sup> コンクリートなどで覆われていない素掘りの用水路のこと。

地域は3反田んぼになっているのですが、佐須地域は10アールなのです<sup>4</sup>。いずれにせよ土手、畦畔、俺たちは土居土手と呼んでいるのですが、畦畔の面積が大きくそこが除染されていないので、この際、村と相談して土地利用の観点からいって基盤整備に手を挙げてはどうかといっているところです。その中で何を作るのかということですが、今のところ皆で相談したのは後進国で作っているソバ、後は菜種を作って、後進国は段々だんだん経済が発展していますからこういう物が足りなくなるのでこういうものを作っぺと村と協議中であります。

それから、佐須には旧小学校があるのですが、佐須小学校、明治時代に作った学校ですが、これをなんとか残して佐須の文化の発展、昔は小学校があったためにそこに来ている先生と繋がりがあって、ワイワイガヤガヤと活発な意見があったわけですが、それが廃校になりまして、こんな状況で残してやっぺと思っています。そこ（旧佐須小学校）には囲炉裏もあって、来たことのある人はわかっていますが、現在、再生の会の皆さんに協力をいただいて老人クラブなどがやっています。この学校をなんとか村の施設として残していくことはできないものかと佐須の地区内で議論しているところであります。



そこで、基盤整備の考え方ですが、私の考え方では今までと違ったやりかたでやって行こうとしています。

国が言っているのは6次化しろと言っているのですが、商品については6次化もあると思います。例えばソバについては粉にしたり、6次化で焼酎を作って売る方法、私が村や県の方、今日も見えてますが、お願したいのは、生活環境の6次化、このままでは私達の集落が限界集落になってしまうので、このふくしま再生の会の皆さんと都市との交流を進めて、なんとか限界集落にならないようなそういう基盤整備を考えられないものかと、今佐須では議論をしているところであります。そういう6次化というのが私の持論であります。そういう環境の6次化で東京の人が佐須に来て一時生活を楽しむというような動きを、限界集落にならないような動きを基盤整備の中で考えればよいなど考えております。色々ありますが、なお田尾理事長さんは今度この辺に住む、定住したいということですが、我々は大歓迎であります。今日いる皆さん早く手をあげていただければ順番で私達が中心にお世話しますので、よろしくお願いたします。特に私達の集落については、村長の出身地であります。それから農業委員会会長菅野宗夫さんも出身地です。今度、村会議員の選挙がありまして、我々の集落からも村会議員を出すことができました。その方が何と議長さんになりました。ほんで3人の長がおります。そこで私は常に会議では「なんと

<sup>4</sup> 3反田んぼの広さは約30アール。滑地域は農地の基盤整備が実施されているが、佐須地域は未実施なので1枚の田んぼの広さが滑地域の3分の1という意味。

か付度でできねえのか」と言っていますが、そうはできないということです。今日は村の復興対策課長も県の人も来てますので、我々、これからどうやってゆくかシミュレーションを挙げていきますのでひとつご協力といえますか、ご指導をいただきたいと思ひます。そして再生の会の皆さんにはどんとこの交流人口の方で来ていただいて、理解していただければいいなと考えている現状です。なんせそんな状況でまだ他のところのようなしっかりした考えはありませんが、60ヘクタールの水田と後は80ヘクタールの畑をどうするかということです。我々の息子達は先ほど言いましたように他に住んでいますから、孫の時代に何とか佐須を再生できればいいなと考えておりますので皆さん方のアドバイスをお願いしたいと思ひます。以上です。

**田尾** 今、公一区长からお話しがありました、私の家はここをちょっと確保させていただきました。今、皆さん避難して6年間住んだ仮設住宅が、帰村する方あるいは他の場所に定着する方とか段々と空いてはいるのですね。それを県が払い下げると言っています。その中にログハウスの仮設が伊達東などにあるのですね。それを安く払い下げてもらったら少し手を入れたログハウスコミュニ



ティができると公一さんと議論しているところでもあります。永徳さんの後にお話しいただく佐藤健太さんはこの隣の地区です。この非常に由緒ある旧佐須小学校の雰囲気は素晴らしいのですが、維持費がかかるということで、村にもお願ひして、私達も協力してこれを残していく、文化を残していくのが大事なんじゃないかと私自身は思っています。その次に同じ佐須地区から菅野永徳さんにお願ひしたいと思ひます。

**菅野永徳 飯館村佐須地区 老人クラブ副会長**

はい、こんにちは。最後に老人クラブの方から何か来いというものですから。先ほど、佐須の区長さんの方から佐須の概要、あるいはこれからの住み具合、それから山田さんからは農業の拡大化ということで、色んな問題が提起され、それを解決するような話で進んでいるところですが、私は佐須で生まれて佐須で終わる訳ですが、やはり今78歳であります。そういう中でこれからのように生きていくのかということになります。これから年寄りの人たちが帰ってくるわけですね。多分、飯館村の中でも先ほどの補助事業のなかで課長さんが言いましたように70何件とあったという話を課長さんがされました。それは大体、65歳以上の方々が、支援を受けて農業に頑張ろうということに連なっているのではないかと思います。そういう中で掘り起してみますとやはりそういう年老いた人たちが帰ってきて、じいちゃん・ばあちゃんの姿を見、そして孫がその姿を見、そしてひこ（ひ孫）がその姿を見ながら生きている、その孫、ひこ、玄孫（やしや

ご)が帰って来るのではないかという期待感を私は持っているのです。ただ、一回はその部落から遠のいても、じいちゃん・ばあちゃんが仕事をされている、またその農業を継いでいくのではないかと思います。ただ問題は経済力です。ここで農業ができてその姿をどのように引き継いでいくかということが、大変大きな問題だと思います。

そういう中で私達はどうしたらよいのか。何と言ってもコミュニティに対して肩を寄り合わせて、そしてその地域で支えていくということが、非常に最近では欠けていっているのです。私はこう昔は「結い」と言っていました。昔は機械もない、ただ脛をまくって田んぼに入って、苗を一株一株植えていきました。それが皆で「結い」と言いまして、AさんがいてBさんCさんがあって、Aさんが一番先の地域で皆が行って田植えをする。Aさんができたらさあ今度はBさんに行こう、Cさんに行こう、そういうのが「結い」なのです。



2010年 事故前のコミュニティの作業風景

そういう支え合いの力が非常に欠けてきた、私はそういうのが残念ですね。今の経済の中で。やはりそういうふうになりますと、いつでも私はいうのですが、「金持ち、物持ち、人貧乏」というのです。やはり金を持ったり物を持ったりしますと、心の支えがなくなってきた。それが地域の滅びるひとつの原因ではないのかと、そのように今さらながら考えます。

これからどういうふうな生き方をしていっていいのかと考えますと、やはり佐須の地域が今、ここに公民館があって、今45人の老人の方々が老人クラブに入っています。しかし、今老人会に入っている45人の方々のなかには車がない人もいます。この中心部・地域の中心部に車での足がないわけです。そうすると若い人たちといいますと、私が一番若いのです。やはり人を迎えに行き人が集まる。そのお手伝いをいただいているのが再生の会で、今まで4回ほどケアをしてもらいました。

わざわざ再生の会の方々が佐須の公民館に来て、こういうふうな状態の古い中で、これはもともとあった太鼓なのです。ここに映っていませんが、これは地域興しの中で非常に賑やかな、虎捕太鼓というものがあるのがあって皆で各市町村まで行って公演をするくらいの迫力のあるもので、その人たちがこの地域から去って行ってしまった。その跡が、今ここにあるわけですが、





やはり私達が地域で支えていこうというのが先ほど区長さんがいったようにこの公民館の建物全体を地域に残して、これからの村興しでなくても、地域興しのために何かできないかなということでもあります。旧小学校が佐須の公民館の一部ということになったのですが、これは全部地域の活動の中で作ったわけです。畳を入れ床に敷き机を入れたりここは戸の枠があったのですが、サッシにしたり、そういう活動をしていました。

飯館村には20行政区があるのですが、飯館村の中には分校があったのです。広い飯館村の中で7行政区に分校があつて、それは不便なところなのです。蕨平とか長泥とかそういう中心から遠い部分に分校があつたわけです。その分校のある7行政区のサミットをやろうということで、行政区の区長さんたちがサミットをやってきました。そして中央はいいのですが、周囲が今少し要請があるというときに中央に7行政区の区長さんがサミット会議をやってその部落にこういうことをお願いしますよという陳情のようなことをして、そして支えてきたわけです。今でもやっておりますが、これも佐藤公一区長に声かけをしながら、そういうサミットを生かしながら地域をどうするのか、地域の中でお年寄りをどうするのか、医療バスをどうするのか、買い物をどうするのか、そういうことを考えますとやはり商工も大事だろうと思います。農業も商業も工業もひとつのテーブルの中にあつて、飯館村の生活、小さい生活が成り立っているのだらうと、大きい生活は自然の中で成り立っています。しかし、小さい人たちはどうするのかということを考えてながらやっていきたい。

先ほど田尾さんがいったように、会津に行きました。今私は仮設に入っているのですが、仮設にログハウスというようなものがあります。それを、この地域でもいいし飯館村の中でもいいのでそのログハウスをいただいて来て、皆さんの要望に応えられるかどうか分かりませんが、どうか夏でもいい、春でもいい、秋でもいい、季節感のあるときにいつでも来て、ここでのんびりと暮らしてまた帰って行ってもいい、そういう人口の交流というものがあつて、そこには経済が湧いてくるという地域を作りたいというふうに考えております。

非常に雑な話で申し訳なかったのですが、それがこれからの、私達はあと3年か4年か過ぎてみますと「今日も生きたな」「今日も生きたな」という心境です。今平均年齢はいくつですか？ それを考えますとこれから村の生き方がどういるふうに変っていくのかわかりませんが、昔のことは昔なりに伝えていく、それが今の若い人たちの目に映って来るか分かりませんが、それを糧にして今後の生き方を変えていく出発点ではないかと思ひます。私は山に育つて山にいます。昔、私はアケビを食わされ山のもを食わされ、そして生きてきました。そういう時代ではなく物が豊富な時代の生き方ですから逆かもしれませんが、じゃあこれからどうするのかということを考える必要性が私はあると思ひます。本当に拙いまとまりのない話で昔話のような話ですが、やはり皆さんにこれから地域の交流というものをお願いしたいというふうに思ひます。以上であります。

田尾 ありがとうございます。今のお話しのように飯館村といっても、中央部と周辺部という色々な要素があって全体がバランスして、非常に良い村だと私は思います。今、周辺のところからどういうふうを考えているかということで二つの地域のお話しをいただいたので、これをめぐって若い世代の村会議員佐藤健太さんから、村づくりの今後を担う若手世代としてどういうふうに考えているか、よろしくをお願いします。

## 佐藤健太 飯館村村議会議員 佐藤工業専務

みなさんこんにちは。飯館の先輩たちは話が非常に上手で、私が追いつくか不安ですが、伝えていきたいと思います。

私は今回初めて立候補させていただいて、村会議員という形で 당선させていただきました。今回、今日も衆院選開票日ということでもあり、選挙の話から少ししようと思います。私、今回立候補したわけですが、正直いって非常にやりづらいというか、何をしたいか分からない、何もできないというぐらいの選挙でした。というのも一応帰村になって初めての選挙だったわけです。ただ村の中に有権者が殆どいない、約1割位しかいない。今日は衆議院選が行われていますが、福島第1区<sup>5</sup>ぐらいの広さの中に、有権者の方々がてんでんばらばらに、避難生活とか避難の生活の延長を過ごしているという形の中だったので、福島第一区と同じような広さの中を有権者を探して歩くしかないという状況、今回定数10に対して12名の立候補がありました。その中で選挙カーを作った方は4名かな5名か、その程度しかいませんでした。というのも選挙カーで村内を回ってもなかなか聞いてくれる方がいない、集まらないという非常に効率が悪い、後、村外を回ってもまとまっているところは殆どない。仮設住宅に行っても大体3分の1を切っているかなという位の方たちしかいないような感じがしました。その中には新しく家を建てたという方が沢山いらっしゃいました。そういったところをご紹介させていただいて回って行くのですが、本当に新築めぐりをしているような状況がありました。皆さん立派な家を建てられて、新しい人生を歩まれているっていう状況がありましたので、その中で色々お話しを聞いてきました。

今回、皆さんにお渡ししたのは僕が公約として掲げたものです。「若い力で元気ある本来の住民参加型の村づくりを」ということを大前提として今回、選挙戦に臨みました。飯館村は私が生まれて育った、さっ

### 若い力で元気ある 本来の村民参加型の村づくりを!!

- 1 村の健全な財政維持と行政の監査機能の回復**

今後、大幅な人口減少が見込まれる中、将来に渡り村の財政が健全でなければなりません、議会の本来の役割を取り戻し5年後、10年後、飯館村が飯館村として存続できるよう財源の確保に取り組みます。


- 2 村民の生命と財産の保護**

村民の不安解消に努め生活支援の充実をはかります。被曝対策の徹底、消防・救急・防災設備の強化、医療・介護・福祉の充実、地権や水利権の堅持、健康手帳の制度化、鳥獣害対策の強化や、空き家バンクの設置、空き家や農地の有効利用の推進をします。


- 3 放射能汚染の早期除去と仮置場の早期撤去**

大部分の除染は完了したとはいえ、山や川、あぜや土手など、まだまだ未除染の場所も多くあり、村内には、未だ230万袋、約80カ所の仮置場があり、村民の復興の大きな妨げとなっています。野菜やキノコや山菜が安心して食べられるようになってこそ本来の飯館村です。


- 4 村施設の有効利用**

「ないものねだりではなくあるもの探し」  
無いものをねだるのではなく、ある物(道の駅、森の駅、スポーツ公園、きこり、ふれ愛館、山林、大火山ツツジ公園、川、道路、学校など)を有効利用し地域交流の活性化を推進します。


- 5 元気ある農林商工業の振興**

飯館牛などの村のブランドの再生と開発、共同店舗や若い世代の元気ある活動の支援、原子力に依存しない再生可能エネルギーの利用・推進に力を入れエネルギー自給出来る村を目指します。





<sup>5</sup> 福島市、相馬市、南相馬市、伊達市、伊達郡(桑折町、国見町、川俣町)相馬郡(新地町、飯館村)から成る衆議院小選挙区。有権者数422,186人

き田尾さんからお話しがあったように、佐須地区の一本南手の通りに位置しています前田地区、飯館村前田という八和木前田と北前田に分かれるのですが、その北前田の方です。北前田のいたい真ん中辺に位置しています。

私の家はもともと農家でした。じいちゃんも林業をやっていて、ばあちゃんは農業をやっていてところで育って来ました。うちの父の代で工業に切り換えたのですが、僕も幼稚園のころは代掻きもしたし田植えもしたし、田んぼや畑も作りミョウガも作ったり、色々なものを作っていました。一番思い出に残っているのは、ばあちゃんが、僕がニンジンが好きだということで二畝植えてくれました。そのニンジンの味を超えるニンジンに未だ出会っていないと僕は思っているのですが、非常に味の濃い美味しいニンジンを私は食べさせてもらったなと思っています。あのニンジンを食べられる日がまた来るのかどうか。家のばあちゃんももうだいぶ歳をとってしまい、さびしい思いでいるのですが、そういった農家ということに関しても、私は少しは携わってきたと思っています。

そんな中で先ほどの農業の話とは少しずれるかもしれませんが、私達世代が村の課題を考えていて、公約にも掲げた一丁目一番地、村の健全な財政維持と行財政の監査機能回復ということからお話します。今、復興創生期間ということで、これから村に戻ってどういうふうに村創りをしていくのかということに対して非常に大きな予算付けがなされています。それで、村は動いてはいるのですが一般会計の規模からいうと震災前が約40億、今の一般会計で220億となっています。非常に大きな予算がついています。それで復興に向かって進んでいくのですが、やはりその大きな予算をどういうふうに分配して使っていくのかということです。今日は役場の中川課長がいらしていますが、役場の職員の数は震災前より少ないのですか多いのですか？あまり変わらないのだと思うのですが、その人数の中でこの約5倍の予算を消化しなければならない。ましてやそれが県や国から降りてくる予算なので単年度予算、何とかやり切らなければいけないということで、なかなか住民との合意形成が取れないまま、ドンドン進めざるを得ないというのを、私自身感じています。

これはやはり住民参加型というのには少し距離感を感じてしまっていて、どうしても若い世代としても村創りに関わっていないという感覚があります。そうしたことでちょっと気持ちが離れてしまうということも起きています。もう少し集まって話す機会があったらということも考えているのですが、やはりなかなか避難をしていて村内にいない、じゃあ仕事が終わったらちょっと集まろうとか、そういったことも困難な状態にあります。日を改めて集まろうといっても皆さん生活スタイルが今まで村にいたのと別な生活スタイルになってしまっているのです、なかなか時間を作って集まるのが難しい状況がここまでありました。そういった中で、村の予算を考えると、なかなか集まれないといった状況にいるわけですが、村役場の方でも色々な政策を組んでやってきて、道の駅なども出来て色々な箱物も新しくなっていますが、実際に私達が心配しているのは5年後10年後、今この予算が付いている間はどちらに転んでも村自体が存続できると、ただこの後、おそらく来年再来年あたりに人口がどういうふうに動くのか、家賃の補助が無くなったりして、戻る・戻らないがその後ハッキリしてくると思うのです。

その時に住民票をどうするのかということによって村の人口が変わってきます。そうすると地方交付税も変わってきます。このあと人口割合分がガクッと減る、7割8割減ったところで村の歳入と歳出のバランスをどうとっていくのかということ私達の世代としては早めに知って、対

策を打っていききたい。3年経っていざとなったときに、それから対応するというのはもう遅いと思うのです。なので、私は議会に立ったということもあります。これからどういうふうに村が健全に存続して行けるのかということをも早めに手を打っていききたい。

村の一次産業という部分、根幹になってきた産業の再生に取り組んでいただいているわけですが、そのほか商工業もあります。私も商工業の一旦を担っている事業所の息子ですけれども、従業員の不足が深刻です。道の駅もそうですけれども、募集をかけてもなかなか集まりません。コンビニでも1,000円近い時給を出しても集まりません。難しい状況です。企業としても仕事はあるのですが、仕事を取り切れない。働く人がいない、老人ホームなどもそうですよね。働き手がない。入りたいという方たちはたくさんいます。でも働き手がないという状況が起きています。

こんななかで村の財政を担っていく、税収をどうあげていくのかということのもこの後の大きな課題となってくるのかなど私は捉えています。この村民の生命と財産という2番目と3番目というのやらなければいけないところではあるのですが、まず大前提としてはやはり村の存続という部分は、私は何としても、先ほどのお話しの中にもありましたように、息子の代、孫の代に繋げたいという思いで皆さんやったださっているわけですから、この飯舘村が飯舘村でなくなってしまっただけでは意味がないわけです。そこをしっかりと守っていくということが私達の世代としても非常に大事なことだというふうに思っています。

私の父親も佐藤孝一（コウイチ）と言います。佐須の公一区長には一方的ですが非常に親近感を持っているわけです。家の父なども戻って事業を再開しているわけですが、歳をとって体調も崩しています。そんななかで私達世代、30代40代、特に長男、今は福島市内に家を建てて住んでいる人もいます。選挙の期間中に長男のメンバーたちと集まった時に、父親、母親が飯舘村の家をリフォームして戻って田畑を始めた、そこを私達の世代のときにどうするのか、いずれは戻らざるをえない、戻らなければいけないということを私達の世代の長男は思っています。このときにじゃあ何で飯を食っていくのか、工業でもいいのかもしれないが、農業の一旦を担っていく、でも農業の一旦を担うにはノウハウが必要ですよ、簡単に流れ作業とちがうわけですからそこに向けて準備も必要になってくる。そういったときにどういう流れで私達の世代がこの村に戻って仕事を再開していくのか、生活の営みを再開していくのかということに対しての道筋をどうつけていくのかというのが私達にとっても非常に大きな課題だなと思っています。

人口が少ない、伸びないという中ですが、そこをある意味ベースとしてさらにこの先どうしていくのかということですが、村の人はなかなか戻ってこないという状況があるわけですが、私達の工場、家の家業ですけれども、もしかしたら外国人というところもありえるのかなど思っています。村に戻って来ない、でも家はあるという人もいるわけです。この家をどういうふうに利活用していくのか、「ただただ飯舘に置いておだけなの?」、「じゃあ私達に貸してくれよ」ということもひとつ有りなのかなと思います。そこに外国人労働者という人たちを受け入れて工場ですっかり仕事をしていただいて定住していただくというのも、ひとつの私の案としてはあるというふうに思っています。

そんな形でこの後5年、10年ではとてもじゃないけどなにも変わらない、そんなに全然変わらないというわけではないけれど、そんなに大きく何千人何万人というかたちにはならないとは思いますが、そのなかでも一步一步村という部分を次のステージに進めていくのかということをも

私は引き続き考えていきたいと思っています。それと合わせて村をなんとかしようということで地に足をつけて支えて下さっている大先輩たちがこうしているわけですから、そこにも今後教を乞うていきたいなと思っています。また皆さんの引き続きのご支援をいただきながらこの後も進めていきたいなと思っています。この後もセッションがありますので、中でも色々な方たちとお話しができればと思っています。以上です。ありがとうございます。

**田尾** どうもありがとうございました。若い世代として今から村をどうするかを真剣に考えている人が村会議員になったということです。それでは村から来ていただいた方が終わりましたので、これを踏まえて東大溝口教授から、再生の会副理事長としてもどういうふうに支えていくか、一緒に協働していくのかという観点からお話しをお願いします。

### **溝口勝 東大農学生命科学研究科教授 Fukushima再生の会副理事長**

こんにちは。この目次によりまずと東京大学農学生命科学研究科教授となっていますので教授とっておきます。もうひとつはこの「ふくしま再生の会」の副理事長を仰せつかっておりまして、どちらの立場で話をするか迷うところなのですが、今日はどちらかという教授側でお話しをしたいと思います。最後に今日は佐藤健太さんからお話しがありましたが、私が初めて飯館村に入ったのが2011年6月でした。それからもうなんと6年半以上経っているわけです。最初の頃は本当に何ができるかということやずっと探しながら、そういう活動の中で再生の会と出会って、一緒に歩んできているというのが現状です。この6年半飯館村に通いつめて、その時点で何が必要か、何ができるかを考えて行動しているのですが、いまの今日時点で一番必要なのは、最後に佐藤健太さんが言われた若い世代、若い人たちをどうやって引き付けるかということだと考えております。



今日、最初にお話しがありましたけれど、今年の8月26日に東大応援部を連れて行ったのは、実はひとつの実験だったわけです。永徳さんのお話のなかにもありましたように、佐須小学校を利用して老人クラブの方に応援部の元リーダー長と現役のリーダー長を連れて行きました。ついこの間、東大野球部が法政大学に二連勝しましたが、因みにここにいる研究科長は去年まで野球部の部長でした。ということで今、東大の野球部・応援部の人気がすごいのですが、その応援部の元リーダー長が飯館村を元気づける活動に協力したいと言ってくれたのです。実際、若い応援部を連れていくと本当におじいさんおばあさんの顔色がパッと明るくなるのです。その様子を見て、本当に飯館村で求められているのは若い人のエネルギーなのだということを、この8月の末に彼らを連れて行ったときに実感しました。ということで、大学は学生の宝庫です。若い連中の宝庫です。色んな年寄りといっっては失礼ですが、「最近の若い奴は」と言いますけれど、彼らには本当にものすごいエネルギーがあります。ですから若い人たちと一緒に今の飯館村の課題を共有して、若い発想でもってどういうふうに「再生の道」、もっと言えば「逆転の道」を見つけるか、それが私たち大学人ができる協力・協働ではないかと思っています。

今日これからポスターセッションがありますけれど、私たち大学研究者が作ったポスターもありますので、若い力の可能性を意識しながら、どういう形で村を再生できるのかをお考えいただきたいと思います。

中川課長の新しい農業の再生のシナリオの中で「それでもなにか新しいものに取り組みたい人は」というのがあったと思うのですが、実は私が貼っているポスターはまさにそれで、私自身は3つの課題に取り組んでいます。

ひとつは、山田猛史さんのところの牛の放牧で、牛をリアルタイムに見られるようにして、牛の健康状態を判断できるようなことができないかと、24時間カメラを電源がないところで使えるシステム開発を考えています。

もうひとつは除染が終わった後に、一番困るのは今日みたいな大雨のときに、セシウムを含む泥水が上流から流れてくる。そのセシウムを含む泥水を入れない技術の開発を考えています。

三つ目は電気柵の問題です。

以外と知られていない問題なのですが、6年間住んでなかったものですから野生動物が「明日は収穫だ」という頃になるとイノシンがやってきて全部荒らしてしまいます。苦勞して作ったのに最後の最後にながかりしてしまうわけです。そういう思いを毎回宗夫さんの所でしていました。そのときの一番の問題は何かというと、電気柵を張り巡らせるのですが、大事な時に限って電気が通じていないことなのです。伸びた草が電気柵に触れてどこからか漏電して、大事な時に動かない。それでその電気柵の漏電具合を遠くから見ることはできないか、すべて今をときめくICTとかIOTの技術を農地に持ち込むという方式で開発を今考えております。これらの開発は、福島県の復興対策事業に採択されています。

最後に農学部として宣伝です。我々農学部には畜産から農地、農業機械まで色々なメンバー、いろいろな研究者がいます。ですからそういう研究者あるいは協力者をどんどん利用していただけるように現場から色々な声を上げていただきたいと思います。それを私が再生の会を通して汲み取って農学部を持ってきて一緒に現場の問題を解決していくような取組をしていきたいと思

## 安全な農畜産物生産を支援するICT営農管理システムの開発

東京大学  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

溝口勝  
東京大学大学院農学生命科学研究科  
amizo@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

**はじめに** 私たち東京大学「福島復興農業工学会議」は2011年の原発事故直後から「農業工学」の研究を活かして飯館村で研究活動を続けてきました。その一つが現実的な農地除染技術の開発を軸にした農業再生の取り組みです。しかし、国による除染がほぼ終了し、避難指示が解除された現在は、帰村した方々に対する現実的な農業再生の支援が必要とされています。そこで、私たちは、平成29年度地域復興実用化開発等促進事業に本テーマを提案し、7月下旬に採択されました。現在、本研究科の研究者・事務職員が一丸となって本事業に取り組んでいます。

### 農業・農村の再生

FM5 Field Monitoring System  
モニタリングのみ

HALKA  
モニタリング+制御

ICTで実現する！  
遠くからセンサーに  
対応可能

水田  
佐須地区 (M氏水田)

ハウス  
松塚地区 (H氏ハウス)

牧畜  
松塚地区 (I氏放牧地)

### 避難先でのモニタリング

水田  
水位、水質、生育  
風射能

ハウス  
気温、CO<sub>2</sub>、生育  
風射能

牧畜  
産卵回数、生育  
風射能

### 避難先からの操作

水田  
濁水の流入防止  
濁水の放射性C濃度は高く、流入防止が必須

ハウス  
サイド窓の開閉  
観念と生育にはこまめな気密制御が必須

牧畜  
排水ポンプの始動  
除染現場は排水が溜り、明流の水抜きが必要

### 本システムの発展

避難者

- ✓ 大規模農家
- ✓ 兼業農家
- ✓ 新規就農者
- ✓ 海外

飯館村  
現地

### ビジネスプラン

販売会社  
農産物直売店・レストラン

HALKA  
(特許申請中)

農業センサー  
開発先: 東京大学・農研機構

H29: 飯館村で実証実験

(将来) 飯館村で、組立工場、マーケティング、海外展開、等々

### (活動拠点) 飯館佐須事務所

ますので今後とも是非よろしく申し上げます。私からは以上でございます。ありがとうございました。

**田尾** ありがとうございました。私は福島に泊まる時、酒を飲みながら時々溝口さんと話しているのですが、飯館村が一生懸命に小中学校が戻って来る受け皿を準備しているのですが、農業高校はどうなっているのかなということが気になっています。県立相馬農業高校の飯館校です。それがどうなるのか私はちょっと気にして農業高校とプラスICTをコースにした新しい農業高校を作って、溝口さんが東大を辞めて校長先生になりませんかと言っています。若い人を結集するということになる。研究科長さんが校長先生でも結構なのです。ただ明治大学とか帯広畜産の方などと再生の会はリンクしてやっています。日本の現代の食糧問題などで世界に発信するときに大きな力になります。飯館村の農業を基盤に徹底的に新しい農業、伝統的な農業を研究し尽くして、各大学農学部を結集して何かを作るというようなことをやっていけば、若い人が全国から、あるいは全世界から集まると豪語し、若いエネルギーを何とか引き出すということで、溝口さんには是非よろしくお願ひしたいと思っております。ちょっと明治大学から竹迫さんから提案があります。えーと竹迫先生ではなく本所先生からです。

#### 本所靖博 明治大学農学部専任講師

皆さんこんにちは。本日は第16回報告会開催おめでとうございます。去年のここであった会から参加するようになったのですが、2月の東銀座であった報告会のときに、福島の野菜がどういふふうの評価されているかとか、大学の野菜がどういふふうの評価されているかというお話をさせていただきました。明治大学の方では昨年度から学長ファンドがこの飯館村の研究のためにつきまして、今年も申請したら200万ほどこの飯館の研究だけ連続して学長が予算をつけてくださいました。私は会計学が専門なのでどうして帳尻を合わせるかということに常に考えているのですが、今回は飯館の農業再興に向けた施設栽培の技術、これは竹迫先生や農場の先生がやっているのですが、私の方は販売戦略の確立ということで、福島や飯館村の野菜が気にならない人にどうやって届けるかということで、アンケート上は85パーセントの人が気にならないと出てますので、それをどうやって届けるかということを考えています。今日はポスタースペースの入り口の方に宗夫さんにとってきていただいたピー太郎とパプリカとピクルス、これに色気のない普通のシールと学生が作ったシールを貼ってみてこれでちょっと来月実験しようと思っています。このシールは貼ったやつと色気のないやつとでどれぐらい値段に差がつくとか手に取ってもらえるかとか、そういうのを来月11日の日比谷公園のファーマーズ&キッズフェスタに出ます。台風がこなければ6万人来るとい



となので、それでちょっと実験していくらで売れるか、明治大学の農場の野菜は普通120円で売っているハウレン草が大さん橋マルシェ<sup>6</sup>とかに出るとマックス200円位まで買ってもらえることが分かっています。大学産が付くと無条件に応援したくなるという感じらしく、女子大生が売るともれなく応援してくれます。先週の火曜日も行ってきたばかりなのですが、皆さんに宗夫さんのシールとか千恵子さんのシールとかが貼ってありますのでどのシールがお勧めかとか、明大が応援しているという感じがあった方が買っていただけるので、ちょっと2種類について何パターンか作ってみたので、気に入ったものがあればこれ(●ラベル)を貼っていただけるとありがたいと思います。どうぞよろしく願います。貴重なお時間ありがとうございました。

**田尾** どうもありがとうございました。僕らが明大ハウスと呼んでいる、宗夫さんのところのハウスで取れたピー太郎を持ってこられたそうで、斎藤さんや高木さんが料理をして今日ご馳走することになっていますので、立食パーティに参加していただければと思います。

これで村側の声、地元の声をご紹介します、再生の会からそれを受けてお二人からお話をいただきました。これで第一部が終りまして、第三部のディスカッション・フリートーキングを5時から行います。今のお話しに向けてなにか質問したいこと、ご自分のご意見がある方は17時に再開します。それまでポスターセッションとトイレ休憩を行います。隣の部屋にポスターが展示してあります。各チームの人が前に立っていると思いますので詳しくご議論いただきたいと思います。以上で17時に再開いたします。よろしく願います。

## <第二部 ポスターセッション>

ポスター一覧は39ページ参照。

ふくしま再生の会ホームページよりダウンロードしてご覧いただけます。

<http://www.fukushima-saisei.jp/records/20171022/2261/>

---

<sup>6</sup> 横浜港大さん橋で不定期に開かれる市場。大さん橋の管理者である横浜港振興協会、神奈川新聞社などからなる「横浜港大さん橋マルシェ実行委員会」が主催している。会場に大学ゾーンがあり明治大学農学部も出店している。第4回目は2017年12月2～3日に開催される。

### <第三部 ディスカッション>

**田尾** 最初に、第一部を踏まえながら何を討議していただけるといいのかということ、村側の立場から菅野宗夫さんお願いします。菅野宗夫さんは飯館村農業委員会会長、私達のふくしま再生の会の福島代表・副理事長です。最初に口火をきっていただきますのでよろしくお願いします。

#### **菅野宗夫 ふくしま再生の会副理事長 飯館村農業委員会会長 佐須地区 農業**

飯館村の菅野宗夫です。再生の会の皆さん方、東京大学大学院の農学生命科学研究科長丹下先生はじめ多くの大学の先生方、多数の関係者の皆さん方に共有する問題として飯館村の再生のためにご指導いただいていることにまず感謝申し上げます。本当にありがとうございます。先ほど中川課長さんからもお話がありましたとおり、(避難指示)解除をされてもう半年間が過ぎたわけではありますが、課題は山積みであります。しかし、村民それぞれが生活の再生のために動き出しております。その動き出している姿は様々であります。飯館に戻って再生の道を考える人、あるいは飯館に戻れない状態のなかで、再生を考えている人、それから二重拠点を考えてやっている人と、様々でありますけれども、それぞれが今できることを賢明に努力して頑張っている姿が現在あります。特に先ほどお話しされました地域のリーダー的存在の山田猛史さん、そして村の担い手というか地域の将来を考えて、この度村会議員になられました佐藤健太さんをはじめそれぞれ積極的に飯館の地で取り組んでいる姿が見られます。

生業なり生きがいに対して動き出している姿がありますが、全くマイナスからのスタートであります。こういうことを考えると失ったものの大きさを痛感します。特にこの避難生活、6年というのは本当に長いです。まったく長いです。避難先で自立に向け3年目あたりから動きが見られるようになりましたが、心身が弱く動きをとれない人や、老人の方の生きがいのある生活に向けての問題に直面しております。

避難前からやっていた営農を避難中も継続してやってこられて、いざ解除になった時に直ちに地元で農業なり生業をやるうとしていた中枢の人が、今、病に苦しんでいるということも数多くあります。その姿を見ると悔しくてなりません。そういう実態がいっぱいあるという6年間です。6年間の重みというのは全く重いです。事故直後は見えない放射能との闘いでした。人間の分断もいっぱいありました。今でも少なからずありますけれども、それぞれが理解をしあって進む道が違っていてもそれぞれ村民が理解しあって進む形になってきているのは確かです。そんな中で我が家の事故後の対応と今後の取り組みをお話しさせていただきます。

我が家では7人の家族ですが、2世帯に分かれての避難生活をしております。来年は飯館の学校が再開になるわけではありますが、厳しい状況があります。我が家の孫たちは当時の混乱のなかで、本来飯館の仮設学校に行きたかったのですが教育委員会のその当時の混乱の中からは行くことが出来ず、避難先での学校になってしまいました。その避難先の学校に順応して今はその学校、その地域が故郷のような気持ちになっています。ですから、直ぐ帰村できるのは私ら夫婦と父親の3人です。

事故直後の我が家の対応としては、まず生きがいを求めて宮城県丸森町の農地を60アールお借りして、そこでお米の栽培をして今年も継続中です。今年で7年目、これから我が家も営農再開をしていくわけですが、丸森町の借地での栽培は生きがいを含めてお世話になった地域との深

いコミュニティもありますので、当分の間続けながらやっていくつもりです。

田尾さんはじめ18人のメンバーの方々と事故直後の6月に会いがありました。そこから活動が始まったわけですが、今日は初めての方やご存知ない方もおられると思いますので敢えてお伝えします。田尾さんはじめ皆さん方は東京の地を含めて福島から離れたところにおいて、「片や生活を奪われて大変な状況にある人がいる、遠く離れたところに居ただそれでもいいのかな、やはり現地に行ったら何かしら私達にできることがあるんじゃないかな」ということで、我が家に訪ねてこられた方々です。そういう方々との出会いであり被災地で被災者と協働して継続的にということの基本とし活動が始まったわけであります。



ボランティア精神で、溝口先生はじめ多くの方々にご指導いただいています。師弟関係も含めて組織を超えて協働して、今では科学的な信頼できるデータを基にしてこれからの再生の道に繋がるように発展をしています。今、私のところを活動の核として事務所を設けており、そこには充実したものが次から次に入ってきております。産業界の富士通SSLさんの協力による70インチの大型タッチパネルを寄贈いただき、情報提供や体験を含めて若い人たちの研鑽の場にもなって、効果を上げているところです。本当に感謝に堪えない次第であります。これからの復興のためにおおいにプラスになる面があるなど考えております。

これからの個人的な形の取組であります。現在は営農再開に向けて積極的に取り組んでいます。不安な面はいっぱいあります。でも前に進まなければという気持ちで今できることをやろうという強い気持ちでやっております。身の丈に合った姿で、ゆくゆくは地域に波及できるものということで取り組んでいます。

かたや宮城県で生きがいを得ているお米の栽培も続けながらではありますけれど、最先端の科学技術の活用、特にICT活用でありますけれども、これは明大と産業界のルートレックという会社の協同開発による野菜栽培です。これからの農業を考えた場合に省力化されて安全なものを栽培できるということもあります。このようなものを地



域の人と一緒に生産し、付加価値を高める6次化にもっていきたいと考えています。先ほどピクルスの話がありましたけれども、あれは飯館のふれあい館で明治大学の先生を講師としてお招きして講習会を開いて製造したものです。この野菜については県の検査も受けており、安全なものを自然の恵みとして皆さんに提供していくことが大事だと思い取り組んでおります。

次に酒米の栽培についてですが、今年40アールほど作付をいたしました。一昨年から酒米の実証実験をしてきたところであり、今年は直播<sup>7</sup>で取り組みました。GPS機能のついたトラクターで試乗会も兼ねて、このように無操作で除染した条件の悪い田んぼに田植えを行いました。鴨の被害もいっぱいあり、夏の長雨もあり、いったいどうなるのかなということもあったのですが、写真は一昨日の現在の姿ですが、ここまで実りました。

本当にチャレンジすることの大事さですね。田植えを6月の1日に行ったということで、本来なら、直播というのは5月の中旬ごろまでに終わらなければいけないのですが、敢えて遅くやってもどうなのだろうというところも踏まえての作付でした。ひとつ、この地域の起爆剤になればいいなということで、酒米作りにチャレンジ

しました。もし軌道に乗りそうであれば地域ぐるみでひとつの製造会社のようなものを作ってやって行きたいと考えています。大事なのは皆でやることだと思っています。その他、田圃は転用できるような所は畑地化するとかさまざまな対応も考えて取り組む必要があると考えています。どうしても水田でないと利用できないところはホールクロップサイレージとか飼用になりますが、飼料米の栽培を図り、併せて家畜の導入も検討しているところであります。大きな課題であります。



<sup>7</sup> 水稲直播栽培は、種籾を水田に直接播種する技術であり、全国で約2.6万ヘクタール（25年度）の取組。農林水産省ホームページより  
[http://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/zikamaki/z\\_genzyo/pdf/zikamaki\\_zyoukyou\\_25.pdf](http://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/zikamaki/z_genzyo/pdf/zikamaki_zyoukyou_25.pdf)

復興の道を考えるときには一人ではなにもできません。とても大きな課題であります。面としての地域全体を良くしていかなければダメだということを踏まえると、先ほど区長さんからもお話しがありましたが、農地の基盤整備が必要条件です。農地は農地としてしっかりと守りこれから食えるような産業にしていかないとだめだということで、佐須地区には基盤整備というのは大事な部分です。

これは昨日の朝の風景です。佐須の峠から見たところと虎捕のところですが、これからの復興再生を図るには基盤整備、条件整備をして活用するところはちゃんと活用していくことが大事だと思います。でも農地として活用できない山の入り江になったところとかの農地活用できない場所は耕作放棄地にしないで別の利活用も必要だなと、地域で区長さんを中心に話し合いをして12月を目途にまとめていきたいというようなことで進めているところです。



左 佐須峠より 右 虎捕の農地

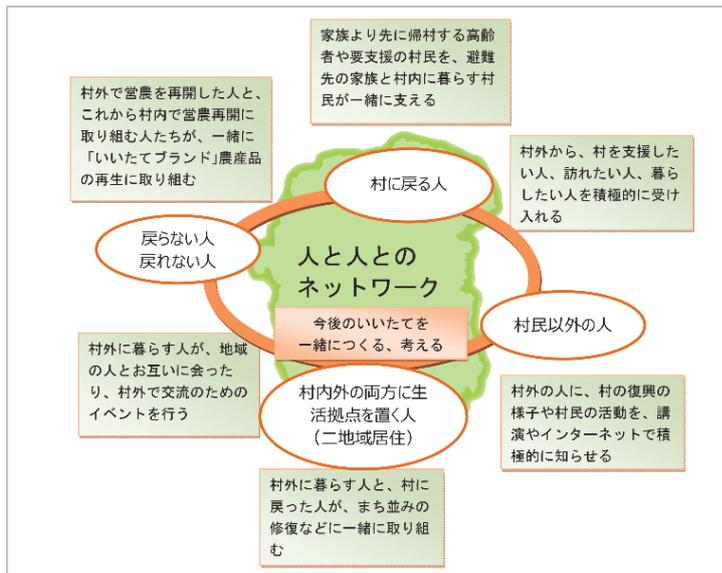
併せて大事なものは、こういう「なりわい」の生産基盤の整備も大事なのですが、もうひとつは生活環境の整備なのです。先ほど永徳さんからもお話しがありました。コミュニティの部分も含めて、本当に暮らしやすい地域というものを皆で話し合いをしてやって行く必要があるなというふうに考えております。今まで地域の拠り所であった旧佐須小学校。これはとっても大事な活用の場所です。特に佐須は交流をとおして地域を作ってきた面があります。そういう実績もありますので、なんとか都会から見たら田舎暮らしというか里山暮らしというか、自然と密着したところに癒しの部分も多いと思います。

田尾さんは避難解除されてすぐに飯舘村民になられました。現在、我が家のところに住所がありますが、定住するところはこの公民館の近くを予定しています。地域活性化を都会の人と田舎の人と一緒にあって取り組むことも必要なのかと思っております。



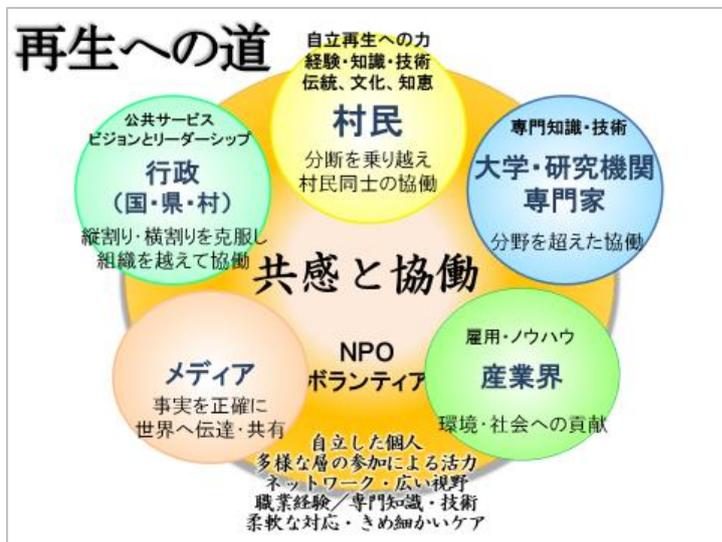
現在、飯舘村は復興計画を策定いたしまして「ネットワーク型の新しい村づくり」ということで動きだしております。

村に戻る人、戻らない人、戻れない人、それから村外の両方に拠点を置く人、これに加えて佐須ではずっとやってきましたが、村民以外の人との交流ですね。こういうことを大事にしながら



やってくる必要がありますし、再生の会会員、皆そうなのですが村民以外の人、図のここに位置付けられています。こういうところを大事に考えていくと、これから再生の会の皆さん方含めてですね、今日お集まりの皆さん方、生きるうえで田舎暮らしの良さも多くありますので一緒に共有できる飯舘村だと思いますので交流の大事さを考えていただければと思います。

再生への道でありますけれども、いつでも私は思うのですが、どうしても行政だけに目が行きがちです。行政だけに頼ってればいいと思っている村民の方もいると思いますが、実際は村民が自分で自立しようという気持ちがなかったらダメです。事故で村民が分断されていますが、やはり分断を乗り越えて、俺は佐須に帰らないからいいんだというのはなくて、佐須に帰れないけれども自分の故郷をどうしたらいいのかというふうに気持ちは変わってきてい



ます。再生への道については共感して協働することが不可欠であると常に思っています。

行政は行政として、縦割り横割りの垣根を越えた形で協働し、メディアも事実に基づいて正確な情報を世界の人々に伝えることが、この情報化時代に大切であると思います。当然、産業界も果たす役割があります。大学を含めた研究機関・専門家はデータをもとに理論を考えますが、そのデータを絶えず現地で実証して理論を高め、現場で使える実践的なものにして、行政とマッチングしてやっていただきたい。大学や研究機関は各分野で深い理論的なデータをいっぱい持っていると思います。でも、ひとつの分野だけでなく様々な分野が結束して、現地で実証して再生の道に提供できるものにならないとダメだと思っています。今再生の会に入って活動していただいている皆さん方、特に東大さんも明大さんも関係する方々は現地に入って活動しています。考えようによっては、大学と聞くと研究のための研究というふうに見るわけですが、実際に感じているのはそうではないです。地域の再生に役に立つ大学になりたいということでお世話になっています。ここが大事なのです。そういうことで本当に私は嬉しく思っていますし、また、何を求めているのかを私達が声を出さないとダメだということがそこにあります。先ほど溝口先生が大学に声をかけてくれ、私達を利用してくれというのと同じことです。先ほどのポスターいっぱいありました。あのデータも大事な大事な協力から得られたデータであります。あのデータはこ

れからの再生の道に生かされる貴重なデータだと思っています。これからも継続して積み上げていく必要があるのかなと思っています。飯館村民の自立再生に、そして村の再生復興のために、そして次の世代、に向けて何をすべきかということを考えたときに今日お集まりの皆さんがたに協議をしていただく、第三部になるのかなそこで協議をしていただければ大変助かります。今日は元気をもらって明日からチャレンジに励みたいと思います。よろしくをお願いします。本当にありがとうございます。

**田尾** それでは、18時ちょっと過ぎまで時間がありますので討議に入ります。今宗夫さんの提起されたこと、それから第一部での飯館村からの皆さんのお話しを踏まえて、再生の会の方々あるいは再生の会以外の方々も今日はオープンに参加されていると思いますので、是非、率直な意見があるいは質問をお願いしたいと思います。まずいかがでしょうか。第一部でお話しされた方々への何かご質問からでもよろしいのですが、どなたかいらっしゃいますか。今、佐藤聡太君が来たという情報が受付からあったのですが、来てないの？

まず、溝口研究室を経て公務員になってこれから村長になるぞと言っている人ですが、健太さんがさっき話したのですが、若手の代表として東京で就職した人としてどうぞ。

#### **佐藤聡太 飯館村出身 公務員**

こんにちは。溝口研究室を卒業し、現在は公務員をしております佐藤聡太と申します。平日は、夜の12時を超えて家に帰り、朝7時には家を出る生活です。休日は飯館村に興味を持ってくれた友人に対して村を案内する活動をしております。友人は職場の同期や上司、高校から大学院の友人、福島の友人など様々です。内容としては飯館村内を巡るだけでなく、大久保さんの所へ行き、最近のお話を伺ったり、飯館花壇の様子を見たり、他にも田尾さんや宗夫さん、山田豊さんや高橋日出夫さんにご協力いただき、直接現場で動いていらっしゃる方々と交流させていただいております。大学院を卒業しました後も、細くではありますが、飯館村とのつながりを保ち続けております。今日も村案内を行ってきたため、この報告会には途中から参加させていただいております。

**溝口** 将来どうするの？

**佐藤聡太** 将来ですか？そうですね…わかりません。ただ、これまでたくさんの友人に飯館村へ足を運んでもらい、村のあちこちを案内してきました。今日、連れて行った友達はこう言っていました。「今日、飯館村に案内してもらえたことは自分の将来の目標の何か手掛かりになるような貴重な体験だった。本当に案内してくれてありがとう」と。他の友人たちにも「すごく貴重な1日を過ごせた」、「飯館村を知ることができてよかった」、「(村の人に対して) またいつかここを訪れます」などの言葉をもらっております。将来の飯館村にプラスになるかどうかは分かりませんが、このように喜ばれることはすごくホッコリします。

**田尾** どうも。まだ言い足りない？

村民の方から、今の若い人に向かってなにか注文でもありますか？

**山田** 典雄さ～ん（菅野典雄村長）、聞かないと～！

（会場爆笑）

**田尾** 宗夫さんのお話しにあったように、困難な6年間なので大変困っている方々も多いのですが、村民の方がなんとか自立して再生の道を探る、主体は村民だと思うのですね。そこに予算を付ける、持続させるかは、聡太さんにはまだそういう力はないかもしれないけれど、そういう道でもあるし、村役場の中川さんにもお願したいところですし、森口さんにも相双事務所としてよろしくお願したいと思います。再生の話の中で、具体的に牧場の問題とか野菜とか農業の再生をこうやりたいのだというお話がありましたが、何かご質問なりご意見はありませんか？あるいは具体的には自分はどういうことができるかと、再生の会の会員の人でもよく言っている人もあるのですが。どうぞ。

**溝口** すみません。溝口です。また立っちゃいましたけれど、実は佐藤聡太君は私の大学院、マスターコースに2年程いて、彼は卒業する前、就職するときに村役場のために何かやりたいと言って、村役場も受けたのかな。でもその時に私はすぐ帰るのではなくて中央官庁に行っているようなネットワークを広げて、その上で帰った方がよいという指導をしました。

ですから今帰らないのは私のせいです。本人は本当は直ぐ帰って村のために何かやりたいと言っただけけど、今は直ぐ帰るのではなくてむしろネットワークを広げて、色々なやり方、日本の官庁の意思決定の仕方を学んでそれからでも遅くはないはずだからと言ったのですが、どうもさっきの歯切れの悪い官僚っぽい言い方になってしまって、昔ほどハッキリ言わなくなったなどという印象です。ちょっとその辺、役人に毒されてはいかんなど思いながら、ただ、本人はそういう気持ちを持っていますので今後とも暖かく指導していただきたいと思います。今日は日曜日でもありますし、佐藤君のお役所的答弁に「喝！」

**田尾** それでは石川さん。

**石川** 山田猛史さんに質問です。先ほど、これからの松塚では副業（複合）ではなくて専業だとおっしゃった。それはどうしてなのか？ 猛史さんの畜産だけに言えることなのか、松塚の地域40町歩あるとおっしゃった、そこが全体でそうなのかをお聞きしたいと思います。

**山田** 松塚地区の問題ではなくて村全体で大体以前は複合経営だったのです。米を中心として牛、それから花とかタバコとか、あるいは野菜とか、そして夏の期間はそのようにして、今度冬になつと稲刈りが終わると男たちは出稼ぎに出るというようなのが普通の農家の生活パターンでした。今、これからまた、それと似たような経営というのは当然望めないのではないかなと思うのです。この際だからやる種目をひとつに絞って、後もうひとつは、自分が食べるための自家菜園ぐらいの規模にして、そして畜産なら畜産、花なら花、米なら米というような感じの、それだけでも生活できるような経営形態を望んだ方が飯舘村の農業の再生にとってはいいんじゃないかなと。広く小さくではなくて、狭く深くというような経営の方がこれから農業振興の計画する村の方でもそのような考えをベースに考えた方がいいのではないかと考えています。

私は一番先に避難した中島村というところは西白河郡で福島県ではずっと南の方のところだったのです。そこは水田地帯なのです。山はひとつもないのです。そして中島村は面積も県内で1番か2番目に小さい、狭い面積だったのです。ところが和牛の繁殖、仔牛の生産が多いのです。これはビックリしました。周りには草地がないのです。そして牛に何を食わせているかという稲わら、それから、少し畑のある人はデントコーンのサイレージでやっている。そして100頭近く飼っている人がいたり、50頭飼っている人が2、3人、20頭飼っている人が4、5人いるのです。そして、毎年全農で県内の多頭仔牛販売農家を表彰するのですが、一番は鮫川村出身の沢口さんという人が100頭以上飼っていますから80、90頭出すのが一番で2番目がなんと川俣町、今飯野の隣の川俣の川俣高校の裏の人で、この人も草地がない。そして何を食わせているのかという年中ホールクロップを買って与えているのです。その人が70頭飼っているのです。そして60何頭出して第2位、そして3位から10位ぐらいまでに中島村の人が3人も入っているのです。そういう状況を見てきましたから、飯舘村、まだまだ福島県内の繁殖雌牛のなかの10傑のなかに4、5人も入ってもいいような状況の中にあっただけなあとというようなことが避難して考えさせられたことでした。

ですから、これからは益々、水田とかもあまりやる人がいない、農地はもちろん利用する人いないということになりますと畜産の力を借りて、農業再生、農地の再生をしなければならないときだと思っているのです。そうすれば、1行政区に2軒ぐらいの畜産農家、その畜産農家も今言ったように牛だけで食べていけるぐらいの規模の農家を育てる、そうすると40、50軒村内にできるのです。そうすればそれぞれの行政区の水田はさほど荒れなくてすむのではないかと思います。そうするような形で、農業再生をしなければならないし、一番先に農業再生で力を発揮できるのは土地利用型の畜産だと思っているのです。それに加えてハウス型・施設型の花栽培。その組み合わせで営農再開ができるのではないかと私は思うのです、中川課長。そんな感じでこれから複合経営よりも単作の農業経営を目指した方がいいじゃないかなと思うのです。そして以前は農地を集積するのは大変ひどかったのです。俺もやりたい、俺もやりたいという人が意外と多くて。さらには貸すには、俺はまだ出来るなという人が多くて、なかなか農地の集積ができなかったのですが、今はもう借りたいところを好きなだけ借りられる状況になっているのです。ですからドンドン大きくしたければドンドン大きくできますし、そのような状況を利用しながらやるのが目指すべき再生の道ではないかなと思うのです。

**伊井** ホールクロップというのはなんですか？

**山田** ホールクロップというのは、さっき宗夫さんのイネの姿が見えましたね。それが右側の上の黄色くならない穂は出たけれどもまだ身が入らない、そういう時期にもうコンバインで穂も稲も全部牛の餌にするのです。ラップかけて発酵させる。そうすると今は政策で10アールあたり8万円もらえるのです。作るだけで。普通のコメを作って風評で売れないとか飯舘の米は安いとかいうような心配はしなくていいのです。その方が所得はいいのです。



## 伊井 ふくしま再生の会理事

再生の会で放射能測定のコディネートしている伊井といいます。稲の作付でセシウムを測っているのですが、今、ホールクロップのことを聞きまして、今はもうワラも25ベクレルをきっていますしそういう状態なのです。酒米も実りが悪いかもしれないけれども、そういう場合は牛の餌にできないかということも考えたのですが、そのあたりが質問です。我々は東大農学部1号館の地下のサークルまでいでサンプル調製など放射能の測定をやっておりますので、協力できるようなことがありましたら教えて欲しいなと思っております。よろしく。

**山田** 正直にいいますと、村内で餌米というのは普通の人間が食べるような米にするのです。玄米を取るのですが、餌米とか食用の米を作ってもらえるような農家もいっぱい育てたいのです。何故かというと畜産に乾燥した稲わらが必要なのです。それが今、全然ないので、前にいた中島村から毎年買っているのです。ですから近くで稲わらもちゃんと採れるのなら最高なのです。酒米といわず是非ちゃんと作っていただきたいなと思っております。

**溝口** あまりしゃべってはいけなかなと思うのですが、猛史さんの話を聞く度に新たな課題というのか、専門的な課題を得るのです。私自身はもともと農業土木を専攻にしている中でも土の専門家でした。土壌物理という分野です。それで猛史さんのお話のなかで、実は重要な解決しなければならない問題があります。猛史さんも実は何度もチャレンジしているのですが、田んぼは今日の大雨などで水浸しになります。排水が悪いのです。その排水性の問題をどうするか？飯館村の除染が終った田んぼがありますが、ある田んぼは雨が降ったら水が溜まったままとか、色々な箇所があります。その排水性の問題をどう改良していくかということは、技術的にすぐにもやらなければいけない問題です。それは暗渠を入れるという方法ですとか、色々な方法があるのですが、それを村としてかなり本格的に取り組まないといけない。それがまずひとつです。それから、二つ目、さっき伊井さんの質問に対して稲わらが必要だと言った時に、稲わらを作るためには実は農業用水が必要なのです。今の飯館村、まだ農業用水にちゃんと水を通して水を引っ張っているという事例が多分ほとんどないはずですが。実は農業用水というのはどこかの溜池に水を入れてそこから引っ張ってくるのですが、おそらく農業用水路がきちんと除染されているかというそのところもきちんとチェックして進めていかなければいけない問題です。ですから農業用水という問題もありますから、かなり専門的に農学部として取り組む課題はきちんとあります。その辺も一緒になって協働という形で進めていく必要があるのだなということを、今日改めて山田さんの話から感じ取りました。

**田尾** 今農業の問題、複合農家から経営のやり方を変えていったらという話が色々ありました。ここで、先ほどの旧佐須小学校で、ふくしま再生の会は健康・医療・ケアなどを展開しているのですが、相澤さんか中町さんどちらかそのあたりのお話しをお願いします。中町さん。

## 中町芙佐子 ふくしま再生の会理事 臨床心理士

健康・医療・ケアのコディネータといいますか取りまとめ役をしております中町と申します。チャンスを与えていただきありがとうございます。私達の活動のなかで、一番最初に始めたのは

伊達東の仮設住宅です。次に松川第一仮設住宅での活動をスタートしました。トータルして今までに伊達東は35回、松川は29回をやりました。今年の5月からは避難指示解除になったということで佐須の公民館、旧小学校を使ってやり始めました。

何が一番、私達がやっていて良かったかということは、チームで行けたということです。内科医の相澤先生、精神科医の三吉先生、看護師さんの八木さん、若狭さん、そして管理栄養士さんの青山さんが入ってやっております。ソーシャルワーカーの北村さんが色々なことに目配りしていただいてこの会が続いております。改めてみなさんに感謝するとともに受け入れて下さっている仮設住宅の管理人さんのお陰だと思っております。

最初は「いったい何者か」というみたいに、やはりよそ者ですので非常に怪訝な雰囲気でしたが、次第にお茶を入れていただいたり、お菓子を差し入れて下さったりということで、このひとつひとつに私達が元気をいただいたということです。

利用しておられる皆さん、仮設に住んでいらっしゃる方にはむくみがある方が多く、潜在的な糖尿病も気になるところです。皆さん病気のことは表ざたにはなさっていませんでしたが、最近では医師に健康診断書を持ってきてこれは一体どういう意味かというような話を始めて下さっています。信頼関係が出来てきたということです。それからむくみにつきましては、足を毎回マッサージします。効果が非常にあらわれてきておりまして、皆さん足の浮腫みが無くなってきております。後でポスターを見ていただいたらいいかと思いますが、そのひとつに足の写真を撮ったものがあります。非常にピカピカのいい足になっていて、それをみるだけでもとても嬉しい限りです。他のチームでやっていたらっしゃるのは非常に科学的で実績をともなってエビデンスがあるということなのですが、私達は皆さんが飯舘村に帰ったときの生活がいかに守られているか、これから村役場とか社協とも協力しながら、非常に地道にやっていく必要があります。私達の小さいときには訪問看護師さんなどがあったのですが、地域に根付いた保健師さんのように、顔なじみになって、ひとりで暮らしても繋がっているそういう実感もてるような活動を続けていければなあと心から希望しております。ITもありましょし、富士通さんのようにビッグパッドですか、そういうものを上手く活用できるように皆さんと力を合わせながら、村の人達が違和感をもたずに使えるような状況が作ればよいかと思っております。以上、ご報告させていただきました。

**田尾** ありがとうございます。今、農業再生の話から健康・医療のお話他突然私がお願いしました。ふくしま再生の会というのは福島・飯舘村の再生という問題をずっと考えてきたメンバーがだんだん増えてきて議論をしてきました。現地の方々と一緒になってやるという方針なものですから、農業の再生、産業再生を考えるとどうしても必要なのが放射線、放射能の測定、農業技術のサポート、健康・医療サポートです。元気で産業再生・農業再生をやっていただくためには、安心したシステムで健康・医療をまもり、それと人のつながり・ネットワークを確立していかなければいけないという方針が、ふくしま再生の会という名前を付けたときから複合的に発生しているのです。ですからよく最初の頃、私達は放射線測定チームですか、科学者チームですかと言われたことがあるのですが、全然違うのです。全体の地域の産業再生、生活再生をどうやって成し遂げるかということなので、色々な専門、色々な知識、色々な技術を持った人が集まらないとこれができなということです。それがいま私としては6年間の間でそういうことを理解して

いる人が増えているという現実があると思います。今、産業再生に対して私たち自身が力を発揮できるか、皆さんの経験や知識の中に明らかに手掛かりがあるだろうと思うのです。これだけの数の人がいるとかなりの力を発揮できるなどというのが私達の実感なので、是非、こういうことはどうなのだという話を出していただければと思っているのです。小原さんなどはどうですか？

(会場にアラームなりひびく)

**二宮** 今、警報がなったのは東京全体の大雨警報です。ただここは渡壁さんからの情報で絶対安全ですから大丈夫です。

**田尾** 小原さん

### **小原** ふくしま再生の会理事

ふくしま再生の会の小原です。私はモニタリングを担当しておりまして、例えば線量計を積んだ車で飯舘村を回って放射線量を測ったり、ザックに線量計をいれて山の間を歩いてその放射線がどう動いているかとか、村の委託事業の田んぼの土壌調査なんかもやって、セシウムの濃度調査もやっています。ざっくばらんに先ほどからのお話を聞いていて、色々考えさせられますが、モニタリングの活動をしていて、どうも村民の方の痒い所に手が届いていないのではという思いというか悩みを感じています。先ほど、生業としての農業にチャレンジするというお話がありましたが、それはその道のプロの分野の話であって、我々モニタリングチームがお役に立てるところは少ないと感じています。一方で生活環境の整備の点でもっとお役に立てるところがあるのではないかと、そういう痒い所に手が届くようにしたいと思っているのですが、なかなかうまくいかない、そういう点で村民の方、今度新しく村会議員になられた佐藤健太さんなどにそういった、活動が痒いところに手が届くようにするためのモニタリング方法みたいなものがあれば、考えを聞かせていただければ大変ありがたいのですが、よろしくをお願いします。

**田尾** 今のお話はモニタリングチームはかなり広範囲に持続的に測定を繰り返しているのですが、たしかに物理学的に減少しているのをパンフレットなどでも明示してますし、ウェザリング効果、川とか雨で流されて移動している状態ですとか、除染したことでどれだけ下がっているかということ全村にわたって私達のパンフレットが村役場からも出ていると思います。また個人線量計を使った測定もやっています。どうしてそれをやっているかという、村民の方に還元するという目的を持ってやっているのです。科学的にみてこれは安心なのだ安全なのだと評論する話よりも、まず村民の方に見せて、世の中でこういうことが言われているけれども自分の地区は成程こういう状態なのだということを、分かってもらう必要がある。その上で色々な質問や疑問をぶつけてもらう、事実に基づいてやろうということです。これはやはり戻っていない人たち、特に若い世代に今の放射線量とか、お父さんたちが頑張っているのだけれど、そこの関係についての疑問はかなりあると思うのです。そのあたりは私達が説明しながら、どういう状態かを議論していくような場ができれば、非常にいいのではないかと考えています。放射線・放射能の問題だけではないでしょう。仕事に就いてしまって子供を育てるときに戻れないとか、そういう例が沢山あるのです。放射能・放射線に対する不安感みたいなものをどうするか。誰か専門家を信頼できるかどうかという問題ではなく、事実がどういうふうに推移しているか、どうなっている

かということ踏まえて、それを若い人たちとも議論をしていきたいと思います。こちらへんは健太さんどう思われますか。

**佐藤健太** 放射線に関して田尾さんも言って下さったようにずっと調べ続けていられていることは非常にありがたいなと思います。私自身も自分が住む場所、住んでいた場所が今どういった状況に置かれているのか、どういう推移をたどっているのか、今現在どうなっているのかは知っておきたいという思いはあります。ただ、山の中も含めて村に戻って生活して、家のおやじもそうですが秋になるとやはりキノコは採ります。測りもしないで食べます。正直に言うと。今年、僕もイノハナダケをとったのですが、家の前で除染した後で出たイノハナ5000ベクレル超えていました。それでもやっぱりそこにあると一回は食べたいという気持ちになるようで、僕自身は食べてはいませんが、そういった形で小まめに数字を測っていても、個人個人の感覚だよりになってしまうのかなと思います。もちろん飯館に戻った場合、常に放射線がある環境なのでそれに慣れてしまうという部分もあるのかなと思いますし、表からみても果たして数字というものが、どこがどういう数字なのか、どの数字のどのレベルがどうなのだということところがあまり明確になっていないという感じがあるので、数字を見ただけでも判断しづらい部分とマンネリ化してくるという両方のパターンがあるのかと思っています。後、数字が有る・無いにかかわらず、村に戻る・戻らないという部分は、線量だけではない。さっき話があったように生業だったり子供のこと、後は家なんかもそうですが親と息子の関係とか、そういったところにまで及んでくるわけです。かなりソフトな部分に及んでくるので、その中で戻る・戻らないということに対する材料の部分として放射線の数字は必要ですが、それ以外の部分のウェイトもかなりあるということは皆さんにも知っておいて欲しいなと思います。

**中川** 飯館村役場の中川です。今の空間線量の話ですが、村の場合、国と県でモニタリングポストが50基、村独自で88基を設置しております。先ほど言いましたように原発事故になってから、村または国の方がその状況をきちんと公表していないと、かなりな村民の方々から言われてきた部分であります。ある意味隠ぺいしているのではないかとか、わざと低く出しているのではないかとか、色々な疑問をいただきました。国等は責任を持つということで、各所につけたところではありますが、それだけではやはり足りない。後、ましてや除染を進めるなかで、除染の廃棄物の土壌を農地に置いている状況で、あそこからも放射線が飛んでくるのではないかとか、そういうことがありました。その対応ということで、村が国の補助金をいただいて88カ所設置しております。現状としてはその場所の空間線量については理解していただける、後は再生の会さんに道路上ではありますが、走行サーベイをお願いしながら5年間の減少の状況をみていただいているということで、いままで空間線量への村民の理解ということに対してはやってきたところなのです。

今、健太議員からも話がありましたように、ひとりひとりがどの程度受けているのかという部分ですね、やはり個人の積算放射線量の部分も測定しなければならないだろうということで、今、国の方、環境省であります。個人積算線量計を配布しながら、これは帰村した方で希望者の方に配布をし、その方の一ヶ月の読取りをして、時間とか日時まですべてわかるようにということで、相談員の方が「どういう生活をしていましたか？　ここが高いのですが、何をしていまし

たか？」「その時は裏山にいて山仕事をしてたワ」というようなことを、自ら線量計で知っていたことを実施しています。除染が済んだ後、山は20メートルエリアまでしかやっていない、その以降はどのくらいになっているのかということ、国の方には除染するように要望はしておりますが、なかなかそこまで至っていない状況で、それぞれ個人が受けている量を知ってもらうというのもひとつの策なのかなということ今進めているところであります。今120人ほどその機械を持って、環境省が委託している相談員の方々とやっているという状況であります。先日、その中間報告をいただきましたが、やはり高い方、量が高い方もいますし、後は避難先と両方行っている方もいますし一人ひとりそれぞれまちまちであります。ですから今後はそういう健康面で考えるとすれば、個々人の生活実態にあった空間線量といえますか放射線を受ける量を知っていただくというのが今後必要になってくるのかなと思います。あくまでもモニタリングポストはその空間線量率というかたちで知ってもらうということ。将来的なデータ取得ということになるのかなと思っております。今、そんな形で線量の管理をしているという状況であります。以上であります。

**田尾** それではなにか総括的でも結構なので、質問はありますか？ 八下田さん

**八下田** 再生の会、八下田です。会員としてではなく、最後に表示してもらった再生の道のスライドに、協働の中に産業界というのがあってそこだけコメントというのが何も書いてなかったのですね。私も現役で今、東京で働くエンジニアですので、私が今勤めているのはスタートアップで色々あちこちで社会問題のソリューションをどう作るかというような話を会社ではするのです。そういう仲立ちというかつなぎ合わせ、そんなことをどう組んだらいいのかなと思ったりするのでその辺はどうでしょうということを伺います。

**田尾** 企業・産業界としての関わりのことだと思のですが、富士通SSLの方が来られていますよね。この関連でご計画のようなものは？ 何故飯館村に興味を持ったか、社長さんが来られていますか、いかがでしょうか？

**林恒雄 富士通 SSL 代表取締役社長**

富士通SSLの林と申します。産業界を代表するような大それたことはなかなか申せませんが、おっしゃるようなあの輪の中に産業界というものがかっちりないと、復興にはならないと思います。働く場、言い換えれば収入を得る場は絶対必要になります。

私どもの会社は富士通ソーシャルサイエンスラボラトリと言う富士通の子会社で、社会問題を科学で解決しようという社名を持っており、そういったアプローチで色々取組をやらせていただいております。宗夫さんの所に当社の若手の社員が稲刈りや田植えなどでお邪魔して、現場体験して、考える場を設けさせてもらっているのもその一つです。

飯館村復興に向けどう事業を起こすのか、対応プランは具体的なものはまだありません。我々は農業については素人ですので、富士通でやっている農業のIT分野での取組をご紹介したり、試験田のデータ取得など溝口先生のお手伝いをやらせていただいたりしています。しかし、実際にあの場で新しい事業を興すということは、我々外部の者だけでは難しいです。

方策としては、現場で村民の皆さんが色々やっていることを見聞きしながら一緒に考えるということが第一のアプローチだと思っています。つまり、飯館で生活する人間を送り込むことがもてきたら、そこで何か新しく考えることができるかもしれないなと思っています。お手伝いしましょうという立場にいるうちは、やはりだめなのです。飯館に住んで我ごとになって考えるところで本当の力が出てくると思います。そういった関わり方を我々ができる、我々の取組みも次のギアに入れるかもしれないと思っています。これは個人の意思も尊重しながらやらなければいけないので、経営者として業務指示をするのではなく、社員の中にそういった場所でやってみようという人間が一人二人出てきたところで、そういう取組に移れるのかなと思っています。

今、産業界ということでお話ししていますが、この中にも学生さんがいっぱいいらっしゃいますが、学生さんの中でも、飯館に行く、住んでみるということがひとつの新しい道になりうるのかなと思っています。

大切なのは、あの場で利益が出るビジネスができるということなのです。それは作らないといけない。それができると初めて継続していけるということです。それをどうやったら作れるかというのは、あの中で生活していかないと本質的な対策は出てこないのかなと思っています。

例えば、補助金目当ての施策や一時的なイベント、これは作りやすいことだと思います。しかし、それが続いていかないと、生活する人たちのためにならない。ただ、事業創出のキッカケとして、たくさん手を打たなければいけないのも事実です。

たくさん取組みが必要だと思います。スタートアップ企業の方ですとあの場で色々なことを仕掛けると思うのですが、1個や2個で当たるとは思っていません。10個、100個やって漸くひとつにか当たるが出てくるということだと思います。我々が得意としているICTに限らず、食品を扱っている会社の方ですとか、物流や流通をやっている会社の方とかいろんな方が入り混じって色々なことをやることで、化学反応が生まれて、新しい産業が興る可能性が出てきます。今起きている産業と違うものが飯館村で起きることがあるかもしれないということです。

では、その化学反応をどう起こすのか。それは、たくさん手数を出すことかなと思っています。その為には発言にあったように、産業界の取組が少ないので、それを増やすための活動が、我々がお手伝いできるもう一つの取組みだと思います。そして、当社のビジネスが飯館村ででき、会社にリターンが来てくるというのが目標です。そして、これが双方ウィンウィンになる素晴らしい関係だと思っています。そこを目指して継続してやらせていただきたいと思っています。

まとまりのない話になってしまい、いい答えになっているかどうか分かりませんが、申し上げたことが我々の考えであり取組のスタンスです。引き続きよろしく申し上げます。

**田尾** どうもありがとうございます。かなり若い方が飯館村に来ていただいている富士通SSLさんなので、私も社長のご意思は何なのだろうかと考えておりましたが、よく分かりました。富士通SSLさんに就職しながら、傍らで農業などもやりながら環境の良いところで仕事が出来るといったのだったらベストだと思います。

**佐藤健太** 産業ということで、私、去年まで飯館村商工会の青年部部長を4年間、後、県の方の役員を6年間やってきまして、村の産業という部分でも関わってきたところもありまして、この震災後、官民合同チームなんかと一緒に今後新しい事業展開ということも含めて、飯館の産業を

どういふふうに発展させるのがいいのかということも議論をしながら今進めだしたところです。

私の家業は波消しブロックだったりそうした色々なブロック関係の型枠を研磨したり、保管管理・メンテナンスするショットブラストだったりサンドブラストということをする会社なのです。今まで父親が30年間やってきた会社なのですが、私が引き継いだ後、飯館村という場所をひとつの利点として、というのは周りの地区の同業の型枠業者に関しては置く場所がなくて困っている。でも飯館村には場所はいくらでもあるわけです。そこで安い金額でお預かりもできますし、金属枠ということで海からある程度の距離があるということで錆びづらい、後は今後、高速道路が飯館村の付近を通り32年に完成します。物流が楽になる部分があります。浜通り、中通をつなぐ道ができますのでそういった部分でも利点が生まれてきています。実際に震災後に取引先がひとつふたつ増えました。預かっている場所も増えてきていますし、ただそんな中で私達は小規模事業者、本当に少ない人数でやっていますのでどうしても手不足なのです。

といいますのは、私も作業員だけではなく、色々なアイデアも持っている人達が欲しい。どういふふうに今の世の中についていきながら、事業展開をしていくのかというアイデアが自分の中にしかない、どうしても遅れてしまう。自分も作業をしながらそういうところも考えなければいけないとなると、どうしても手一杯になってしまう部分があります。そういったところを色々繋いで下さったりする仲間が欲しいわけです。そういった人が今後、村の中に入ってくることによって若手もまた入ってきやすいです。商工会青年部のメンバーもやる気があるメンバーはたくさんいるのですが、やはり自分たちが中心になって会社を回しているのではなかなかそこまで手に負えない。どうしても今まで通りの流れになってしまう。ちょっともったいない部分もあります。人を雇うというところではお金がかかるので、そうではなくて人を当て込んでいただくと、色々なアイデアを介して、「こういった方法もあるのではないか」、「こういったこともできるのではないか」、という議論を一步として、それをベースに進めていくということが産業界の中でも起きてくると面白いのかな、と私は個人的に思って、いま動き出したところです。是非、繋がってください。よろしくお願いします。

**田尾** 色々多岐に渡るご議論になっているのですが、そろそろ時間が迫っているということで、よろしいでしょうか？最後のお一人いませんか。

**丹羽** この間、見学に行ったときに村役場の方に聞きました。確か帰ってこれない人の声を聞く、それを報告するというお話がありましたので、それを大変期待しております。聞き取りも大変なんでしょうが、それなりの方が行ってじっくり聞けば、なんか解決、ヘルプになるのではないかと思いますのでまたよろしくお願いします。

**佐藤健太** 出しゃばって申し訳ないです。今のお話いただいたNPOという部分について、すごくありがたいなと思っています。再生の会さんのご協力もいただいて佐須地区、松塚地区では住民の合意形成が色々できてきています。私は震災後に神戸に何回も足を運ぶことができました。その中で神戸のNPOの方達が言っていたのは、町づくりという部分で、震災後にあまりにも大きな予算と色々な人達が入ってきてしまって、地元の人達を置いてきぼりにして町づくりが進んでしまった。そのことによって地元へ愛着がなくなってしまった、ということがあったと聞きま

した。今まさに飯舘村も色々な大きな予算がついていて、なかなかその予算を執行するまでに時間が取れなくて、人手も足りなくて、住民の合意形成を取らない、取れないまま進めている例がいくつか見受けられます。私自身もそういうふうに感じています。そこで一番大事なのは間をつなぐ、住民と行政の間を繋ぐNPOという役割、それはNPOだけではないかもしれませんが、そういったところが、飯舘村には20行政区あるので、その各行政区にそれぞれ当て込んで間をつなぐパイプ役、いろんな意見を吸い上げてくれるかたちという部分がこの後出てくるのがさらに住民たちの合意形成を作り上げながら前に進めていくキーになるのかなと私自身感じています。そういった合意形成がされたなかで自分たちが自ら進みだす、そこに国として県として色々な予算をつぎ込んで欲しい、「今このお金があるからこれのためにやりましょう」ではなくて、住民自身が動き出すところに当て込んでいくというのが、本当は一番いいのかなというふうに思っています。

**田尾** それでは立食パーティにしたいのでそろそろ第3部をお開きにします。

私の方から一言だけ、ふくしま再生の会というのは、「再生」というのを最初からなぜ掲げたのか、私自身も村の方々と色々接触し、今日まで6年間やってまいりまして、最初から本当に深い言葉だったのだなと思っています。復興という言葉を使わずに再生とした。復興というとハードウェアという気がして、「再生」というのは精神的なものも含めて分断とか色々な人のつながりを戻していく、あるいは新しい時代に発展性のある地域にしていくということに我々は協力したいということだと思えます。

ただ、私自身は自然と人間の共生関係ということにこだわっておりまして、東京では失われてしまった自然環境の中で産業・農業・生活をやっているところを日本の中で確実に残さないでだめだと思えます。今回の選挙も私自身はあまり興味はないのですが、どの人が言うのを聞いていても、大きな都市が3つ連合してとか、中央集中で何かやるという先入観の人達がお互いにやっているのかなという気がします。自然環境の中で我々が生きてここまで来たわけですから、自然環境を破壊することを良しとして東京一極集中で経済成長を遂げられると思っていたら、大間違いだと私は直感的に思っています。飯舘村に象徴されるような自然と人間の環境を残しながら日本が持続していくということが、最大の安全・安心なのではないかと思っていますので、具体的にそれを実現していくための皆さんのお力を結集していただきたい。NPOとしては先ほど健太さんがいったように、糊付けする役割ということが大きいだろうと思います。以上をもって今日の報告会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

報告会当日の様子は、以下のYouTubeチャンネルよりご覧いただけます。

<動画アーカイブふくしま再生の会>

<https://www.youtube.com/channel/UC-Miq7zZGb-L2IdAWRrRkiw>

※当記録への掲載にあたり、発言者には内容の確認をお願いし、読みやすさを考慮の上、趣旨を変えない範囲で若干の修正を行った。

## <展示ポスター一覧>

### ふくしま再生の会

- ・ 車載測定 5 年間の推移
- ・ 徒歩による空間線量測定
- ・ 個人線量と空間線量の比較測定
- ・ 居宅とその周辺の測定
- ・ ハウス栽培これまでの活動
- ・ 試験栽培の米、野菜などの放射能
- ・ 地産木材の活用に向けて
- ・ 全村田んぼの土壌放射能調査
- ・ 山野草の放射能測定 6 年間の記録
- ・ 食べられる山野草の放射能測定
- ・ 健康医療ケアチームの活動<仮設住宅訪問>
- ・ 老人クラブと協働して健康サポート活動を始めました
- ・ いいたて花さんぽ

### サークルまでい

- ・ サークルまでいの活動

### 東京大学農学生命科学研究科ほか

- ・ 安全な農畜産物生産を支援する ICT 営農管理システムの開発
- ・ ブルーベリー葉に散布処理した Cs-137 の果実への移行について
- ・ アイソトープ農学教育研究施設によるサンプル中放射能測定
- ・ 森林小流域からの放射性 Cs 流出の予測に関する検討

### 明治大学農学部・明治大学農学研究科ほか

- ・ 除染後斜面における放射性セシウム濃度の経時変化
- ・ 根圏の体積含水率測定による自動点滴灌漑量の評価
- ・ 蒸発散量と茎内流量を指標とした自動養液点滴栽培システムを用いたピーマン栽培における灌水量の評価

### 宇都宮大学農学部

- ・ 河川での放射性セシウムの流出形態と経年変化

### 帯広畜産大学環境農学研究部門

- ・ 飯舘村における居久根の放射線量の経年変化

### 京都大学工学研究科原子核工学専攻

- ・ 飯舘村内各地区の空間線量率モニタリングとウェザリング効果
- ・ 福島フィールドワーク 2016

### 国立環境研究所

- ・ 家屋内における放射性物質分布の現場測定と清掃による除染効果

### 東大農学生命科学研究科農学国際いはなプロジェクト

- ・ 大久保金一氏とのまでいな花園デザイン

### 富士通ソーシャルサイエンスラボラトリ

- ・ 富士通 SSL 飯舘村への取り組み

## ふくしま再生の会 第16回活動報告会

主 催	認定NPO法人 ふくしま再生の会
共 催	東京大学農学生命科学研究科アグリコケーン 農における放射線影響フォーラムグループ
後 援	公益財団法人 渥美国際交流財団SGRA ※三井物産環境基金 助成事業
開催日	2017年10月22日(日) 開会 15:00 閉会 18:15
会 場	東京大学弥生講堂アネックスセイホクギャラリー ポスター展示 エンゼル研究棟講義室(14:00~18:00)
参加者	120名



編集：認定NPO法人ふくしま再生の会 事務局

東京事務所

〒166-0001 東京都杉並区阿佐谷北 1-3-6-2F1

電話 03-6265-5850

FAX 03-6265-5859

Mail desk@fukushima-saisei.jp

HP <http://www.fukushima-saisei.jp/>

飯舘事務所

〒960-1815 福島県相馬郡飯舘村佐須字滑 87

福島事務所

〒960-8042 福島県福島市荒町 4-7 再エネ合同ビル

霊山センター

〒960-0807 福島県伊達市霊山町石田字彦平 1-18